

兵庫県立図書館
☎ 078-918-3366



A104643630A

P291.114
10
6

昭和四年三月

兵庫縣史蹟名勝天然紀念物調查報告 第

兵
庫
縣

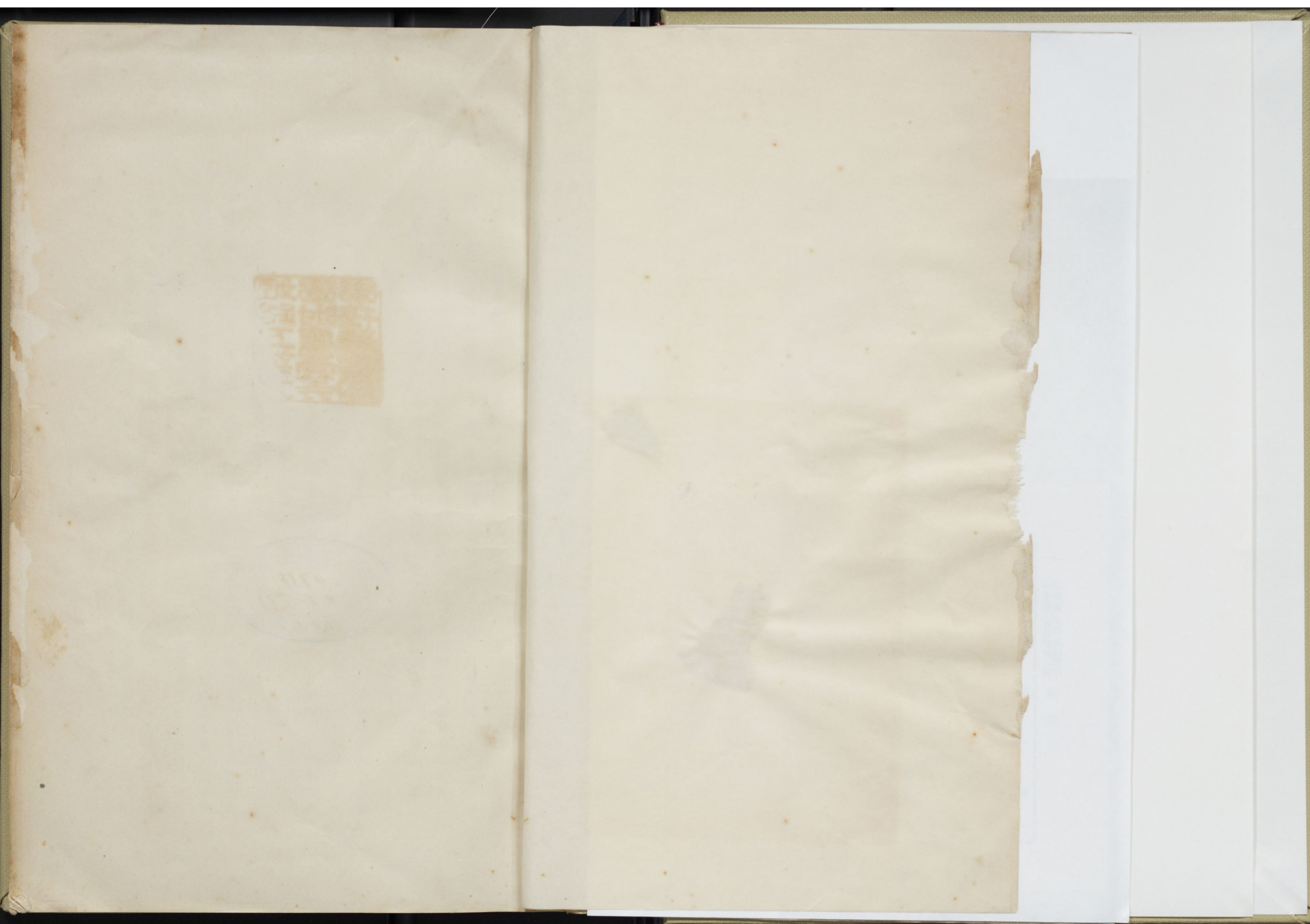
兵庫県立図書館

☎ 078-918-3366



104643630

凡例最後ノ項中ニ城崎郡田龜野村長峠延太郎氏、同郡城崎町
西村佐兵衛氏、玄武洞茶店下糟太郎氏、揖保郡龍野町長櫻
井幸三郎氏ノ氏名ヲ擧ヘキチ脱セリ、茲ニ追記シテ謝意ヲ
表ス。





凡 例

一、兵庫縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第六輯成ル、收ムルトコロ總テ十項、分ツテ史蹟
四、名勝三、天然紀念物三トナス。即チ、加東郡小野町淨土寺、印南郡報恩寺、赤穂郡
赤松氏ノ史蹟、津名郡岩屋ノ砲臺、揖保郡龍野ノ螢、津名郡五色濱、三原郡慶野松原、
城崎郡青龍洞、美方郡濱坂町附近沿岸ノ洞門洞窟、及ビ三原郡淡路國道ノ松並木、以上
之ナリ。コレ等ハ殆ンドスベテ昭和三年度ニ於ケル調査ノ結果ニ成ルモノナリ。

一、本年度ノ調査ニカ、ルモノニシテ、已ニソノ稿ヲ脱セルモノニハ、加西郡一乗寺、印
南郡六騎塚、同郡大日寺ノ五輪塔、三原郡アンモン介産地、淡路沼島ノ片岩類等アリ。
目下調査中ノモノハ、明石及ビ舞子ノ砲臺、淡路發見ノ銅鐸、但馬國分寺、赤穂郡瓜生
ノ石佛等ナリトス。コレ等ハ次輯ヲ俟ツテ報告セムコトヲ期セリ。

一、次ニ本年度ニ於ケル調査ノ概況ヲ記サムニ、昭和三年四月渡部委員ノ史料ヲ覓メテ東
京ニ出張セルヲハジメトシテ、同月印南赤穂兩郡ヘ魚澄委員ノ出張ヲ見、更ニ六月渡部
委員ハ改メテ印南飾磨赤穂ノ諸郡ニ亘リテ踏査ヲ試ミ、八月ニハ史蹟調査委員ノ共同調
査ガ播陽ノ地ニ行ハレタリ。又、天然紀念物ニ關シテハ、同年七月山鳥松本兩委員但馬
ニ出張ノ上濱坂町附近ノ洞門等ニ就キテ精査スルトコロアリ、越エテ九月兩委員ハ淡路
ノ各地ニ踏査ヲ試ミラレタリ。更ニ十二月山鳥委員ノ有馬揖保二郡ニ出張セルコトモア

リタリ。コレ等ノ成果ノ一端ハ即チ本輯ニ示サル、トコロナリトス。

一、本輯所載項目ノ調査ニ當リテ、關係市町村長ソノ他及ビ地方特志家ヨリ、公私ソノ便益ヲ得タルトコロ尠カラズ。就中、淨土寺歡喜院住職鑑快應、同寶持院住職土師原穆秀加東郡小野町助役榎倉顯一、同書記井上吉之介、郷社八幡神社氏子總代河島彌十一、印南郡平莊村長前川昌三、報恩寺住職丸山眞教、同寺檀徒諸氏、赤穂郡赤松村長田淵彌三吉、同役場河野文六、法雲寺住職細川紹德、松雲寺住職秋山觀永、寶林寺住職鎌田秀善同村浦宗新五郎、横山貞造、侯爵蜂須賀家々扶綾部茂雄、津名郡岩屋町長大谷長五郎、同役場書記山本和一郎、同町井戸彌太郎、同徳永喜三郎、津名郡鳥飼村吉岡若一、同小川米一、同米田義雄、三原郡松帆村長柏木傳藏、同郡市村長福川常一、同八木村長島田太平、同村小野秩郎、美方郡濱坂町長中山亥三次、同松岡書記、同町商工會長山本市藏同町眞先香橋、同脇本幾太郎、同小西莊太郎、等ノ諸氏ニ負フトコロ多シ。又、縣ニアリテ常ニ煩瑣ナル庶務ニ當ラレタルハ社寺兵事課中村豊高西村三郎石井秀範金川一ノ諸氏ナリ。茲ニ特記シテ感謝ノ意ヲ表ス。

昭和四年三月

兵庫縣史蹟名勝天然紀念物調査報告

第六輯

調査項目

史蹟

加東郡

第一 淨土寺

一七頁

印南郡

第二 報恩寺

三

赤穂郡

第三 赤松氏ノ遺蹟

四三

津名郡

第四 岩屋ノ砲臺

五五

名勝

揖保郡

第五 龍野ノ螢

津名郡

第六 五色濱

三原郡

第七 慶野松原

天然紀念物

城崎郡

第八 青龍洞

美方郡・城崎郡

第九 濱坂町附近沿岸ノ洞門洞窟第二報

三原郡

第十 淡路國道ノ松並木

挿圖目次

第一圖 小野町及ビ平莊村附近地圖

第二圖 赤松村附近地圖(陸地測量部五萬分之一圖分載)

第三圖 傳赤松圓心置文

第四圖 岩屋町附近地圖

第五圖 松帆臺場遺構測圖

第六圖 松帆臺場遺圖測圖

第七圖 龍野ノ螢

第八圖 青龍洞附近地圖

第九圖 青龍洞ノ玄武岩

第一〇圖 濱坂町附近地圖

第一一圖 下原洞門及ビ地獄極樂洞窟

第一二圖 十字洞門及ビ釣鐘洞門

第一三圖 大島ノ粗面岩柱ノ横斷面

圖版目次

- 第一 寛政三年淨土寺境内圖
第二 (上) 淨土寺瑠璃殿(向ッテ左)及ビ開山堂
(下) 淨土寺瑠璃殿藥師堂内部組物
第三 (右) 淨土寺扁額
(左) 傳開山俊乘坊及ビ觀阿彌供養塔
第四 建久五年在銘銅鈺及ビ拓影
第五 木彫俊乘坊重源座像
第六 (上) 觀阿彌言上狀
(下) 法橋上人某契狀
第七 (上) 淨土寺衆徒定置
(下) 豐臣秀吉書狀
第八 淨土寺筒瓦及ビ拓影
第九 淨土寺疏瓦拓影及ビ花瓦
第一〇 (上) 報恩寺全景
(下) 報恩寺十三重石塔

- 第一一 印南山報恩寺繪圖
第一二 (上) 赤松圓心安堵狀
(下) 赤松則祐安堵狀
第一三 (上) 赤松義則安堵狀
(下) 赤松滿政安堵狀
第一四 (上) 赤松政則安堵狀
(下) 赤松性因安堵狀
第一五 (上) 赤松政村公事免狀
(下) 赤松義祐安堵狀
第一六 (上) 報恩寺奉加帳
(中) 報恩寺伽藍舊記
(下) 十緣勸進帳
第一七 (上) 徳川家光朱印狀
(下) 徳川吉宗朱印狀
第一八 (上) 千種川溪谷
(下) 法雲寺
第一九 (上) 法雲寺古瓦

- (下)版書法雲寺附近圖
第二〇 (左)木彫赤松圓心坐像
(右)寶林寺古瓦

- 第二一 松帆臺場見取圖

- 第二二 岩屋浦松尾御砲臺之圖

- 第二三 (上)松帆臺場ノ遠望

- (下)松帆臺場調練場外方ノ目隠シ

- 第二四 (上)松帆臺場ノ障壁(外面)

- (下)松帆臺場ノ障壁(内面)

- 第二五 (上)松帆臺場ノ遺構(砲座及ビ胸壁)

- (下)松帆臺場ノ遺構(砲座跡)

- 第二六 (上)松帆臺場ノ遺構(彈藥庫跡)

- (下)松帆臺場ノ遺構(火藥庫跡)

- 第二七 (上)龍松臺場跡ノ遠望

- (下)龍松臺場ノ遺構(火藥庫跡)

- 第二八 (上)拂川臺場ノ遺趾

- (下)古城臺場ノ遺趾

- 第二九 慶野松原

- 第三〇 青龍洞

- 第三一 (上)下原洞門

- (下)芦原ノ洞門

- 第三二 (上)釣鐘洞門ノ外部

- (下)釣鐘洞門ノ出口

- 第三三 (左)釣鐘洞門ノ内部

- (右)三尾海岸ニ於ケル岩脈

- 第三四 大島ノ柱狀節理及ビ岩脈

- 第三五 淨土寺淨土堂正面圖及ビ同天井見上圖

- 第三六 淨土寺淨土堂外部隅斗拱詳細圖

(追加)

史

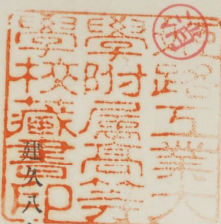
蹟

同	同	同	同	同	史蹟調査委員
渡	吉	中	武	辰	魚
部	井	村	井	馬	澄
多	太	直	尹	悅	惣
仲	郎	勝	人	藏	五郎

加東郡

第一 淨土寺

〔圖版第一—第九及第三五・三六〕



大部庄内別所、淨土堂一宇方三間五葺安置立像皆金色阿彌陀佛三尊丈六像、佛舍利、鐘、藥師堂一宇同安置舊佛八百餘軀」トアリ、且ツソノ大部庄ニ就テ説明シテ曰ク

播磨大部庄者、往古寺領也、然而廢到年尙、而南無阿彌陀佛申後白河院、充賜和卿、即成下宣旨、被差官使、改打四至勝示、已後專爲一圓地、更無相交之方、和卿同以寄付大佛領、一向爲南無阿彌陀佛進止、仍年來同行如阿彌陀佛與觀阿彌陀佛兩人所令補預所職也、抑此庄東北角有隨分之勝地、ト其處、新建立別所號南無阿彌陀佛別所、構立方三間瓦葺堂一宇、號淨土堂、奉安置皆金色阿彌陀丈六立像、修佛三昧、又立同堂一宇、號藥師堂、奉集居庄内破堂之佛菩薩像八百餘軀、仍庄東端宇鹿野原者、爲別所敷地之内、永以奉廻向淨土堂、阿彌陀佛勵住僧之力、致開發之沙汰、以其地利、可充佛聖燈油念佛者用途之由、所加下知也、更以不可被懸庄家本寺之役、且爲常々荒野、無當時之依怙也（下略）

トアリ、又「南無阿彌陀佛作善集」ニハ

(上略) 播磨別所

淨土堂一字 奉安皆金色阿彌陀丈六立像一、並觀音勢至

一間四面藥師堂一字 奉安、堅丈六一、

湯屋一字 在湯、奉結緣長尾寺御堂、並丈六三鉢、觀音勢至四天

施入鐘一口 始、置迎講之後二年、始、自正治二年

彌陀來迎像一鉢 鐘一口

ナル記録アリテ、大部庄淨土堂ト俊乗坊重源トノ間ニ深キ關係ノ介在スベク、延テ東大寺トノ間ニ本末ノ聯繫アルベキヲ思ハシムルモノアリ、蓋シ重源ハ南無阿彌陀佛ト號シ平重衡ノ兵燹ニ罹リシ東大寺大佛殿ノ再興ニ力ヲ傾倒シ全國ヲ勸進セシ有名ナル勸進聖ナルガ、ソノ奉ズル所、純然タル華嚴ニ非ズシテ多分ノ淨土教ヲ含ミ、ソノ説ク所頗ル平易ニシテ衆俗ヲ誘導スル事極メテ巧ミナリシ聖僧ナリ、サレバ大部庄淨土堂ヲ始メトシテ、彼ニヨリテ創設セラレシ淨土堂トシテ有名ナルモノニ攝津渡部、備中、周防宮野庄、伊賀阿波廣瀬等ニモアリ、大部庄ノソレノ如キ、ソノ隨一ナルベシ。然ラバ如何ナル由來ト如何ナル變移トヲ我ガ淨土寺ニアリテ存スルカ。

二

極樂山淨土寺ハ播磨國加東郡小野町字淨谷ニアル一舊刹ニシテ現今淨土宗ニ屬ス、コノ地方ハモト大部庄ト稱シ、東大寺ノ舊領地、分レテ王子敷地高麗喜中島土橋ノ五大字トナル。寺傳ニヨレバ聖武天皇ノ御時行基ニ賜ヒシ土地ニシテ後重源茲ニ巡錫セシ時ニ一廢宇ニ數多ノ佛像ノ露置アルヲ發見シ、見ルニ忍ビズシテ本寺ヲ修造セント志セシモ、事容易ナラザリシカバ弟子僧觀阿ニ命ジテ附近ニ存在セシ數個ノ廢寺ヲ合シテ一寺トナシ永遠ノ計ヲ建テシム、漸クニシテ營構ソノ緒ニ就キ、建久四年孟夏ノ候九間四面瓦葺ノ高堂ヲ建テ藥師如來ヲ安置シ奉ル、是モト廣渡寺ノ本尊ナリ、新ニ日光十二神將ヲ彫鏤シ九箇廢寺ノ古像七百餘軀ヲ合齋ス。同五年又九間四面ノ一堂ヲ建テ金色阿彌陀如來立像 長一丈一尺、觀音勢至八尺ヲ奉安ス、何レモ大佛師丹波法眼湛慶ノ作ナリ、建久八年八月廿三日笠置解脫上人ヲ請ヒテ落慶ノ導師トナシ極樂山淨土寺ト號シ、小野道風筆ノ額ヲ掲グ、コノ額モト東大寺淨土堂ノ額ナリ(中略)又經藏一字ヲ建テ佛舍利六粒 納五輪舍塔之納メ諸大乘經論ヲ收ム、鐘樓ニ架スル所ノ銅鐘ハ建久四年六月東大寺ニテ鑄造シ當寺ニ送クル所ノモノ、前ニ食堂アリ、傍ニ浴室ヲ構ヘ、一千日不斷ノ湯ヲ焚ク、嘉禎元年冬八幡宮ヲ建テ玉殿輪奐丹刻日ニ景シ、拜殿華表等ミナ備ル云々(下略)ト云ヘリ、ソノ果シテ寺領ノ如クナルカ、本員ハ以下項ヲ分チテソノ闡明ニシツ、本寺ガ東大寺ニ對シテ如何ナル意義ヲ有スモノナリヤ、又、本寺ガ我ガ邦文化史上如何ナル地歩ヲ占有シ、如何ナル意味ニ於テ記憶サルベキヤヲ最モ正確ナル史料ニ基キテ考察セントス。

因ニ今茲ニ言ヘル小野道風筆ナル額ハ現在當寺寶庫ニ尙藏サレツ、アルモノナリ。圖版第三右ハ即チソノ寫眞ナリ。道風筆ノ傳モトヨリ信ズベカラザレドモ、コノ額面ノ製作年時ハ鎌倉

時代ヲ距ルサマデ遠カラザルモノタルベク威風堂々タルモノナリ。

三

大部庄ガ東大寺領タリシ時代ハ聖武帝以來トスルモノアリ、例ヘバ東大寺所藏文書中ノ鎌倉末期ト思ハル、一訴狀ノ斷簡ニ天平以來當寺八幡宮御供料所嚴重規模ノ神領ナリト云ヘルモノノ如キソレナレドモ、ソハソノ文字通りニ信ズベカラザル事、モトヨリ論ヲ埃タズ、「東大寺要錄」ニハ往古以來ノ寺領ナリシガ廢絶年尙シカリシヲ重源後白河院ニ申請ヒ宋人陳和卿ニ賜ヒタリトシ、「東大寺續要錄」ニハ久安年中播磨國垂水栗羽赤穂ノ三ヶ所ノ替トシテ大部庄ヲ賜ハレリト記セルモノアリ、コレ亦漠々タル感ナシトセズ。

惟ウニ播磨國ハ土地極メテ廣クシテ地味マタ頗ル肥エ加フルニ京阪地方トノ海運マタ至便ナルヲ以テ、大和及南都ニ建立セラレタル七大寺以下ノ諸大寺ガソノ所領ヲ當國ニ求ムルモノ少シトセズ、就中法隆寺ノ如キハ加古川下流ニ鶴林寺ヲ置キ鶴里ニ班鳩寺ヲ建テ、ソノ寺領統制ニ便セリ、我ガ東大寺亦播磨ニソノ封戸莊園ヲ有スル事多シ、例ヘバ多河郡栗生田廿九町餘、明石郡染水郷鹽山三百六十町、印南郡小田廿四町餘ノ莊園、赤穂郡五十戸ノ食封ノ如キ、何レモ奈良朝又ハ平安朝以來ソノ名ヲ存スル所、大部庄ノ如キ、又ソノ一ニ非ルカトモ思ハレザルニ非ズ。

但シ茲ニ一ノ考察ヲ要スル文書アリ、京都市外山科村隨心院文書中ニアル元久三年四月十五日後鳥羽院院聽下文ニヨレバ大部庄ハ伊賀國阿波廣瀬山田有丸、周防國宮野庄ト共ニ俊乘房ノ所得スル所ニシテ且ツ之ヲ宋人和卿ニ充賜ウベキ事ヲ奏聞シテ御裁可ヲ得タルモノナル由ヲ言ヘリ、而シテソノ伊賀國ノモノニ關シテハ東大寺要錄建久元年十二月日後白河院院聽下文竝ビニ同年十二月十二日源賴朝ノ下文ヲ收メテソノ事ヲ明記セルモノアリ、ソレ等ヨリ推考スレバ或ハ大部庄モ一時平家ノ所領ニ歸シタリシヲ平家滅亡ニ際シ沒官領トシテ賴朝ガ支配ニ歸シタリシヲ、改メテ文治建久ノ交ニ重源ニ宛テ下セシモノニ非ルカ、サキニ云ヘル東大寺要錄ガ本庄ノ由來ヲ說キテ重源改メテ後白河院ニ申請ヒ宋人ニ賜ヒタリトセシハ、最初ニ引用セシ重源讓狀ニモ明記セル所ニシテ（但シ、此種讓狀ノ性質トシテ、由來起原ヲ尊重ニスルヲ好ムモノナル事ヲ、充分ニ考慮ニ加ヘタリ）事實ニ近キモノニ非ルカ。

四

何レニシテモ重源ガ大部庄ヲ得タリトスル事ニハ誤ナカルベク、重源各地ニ淨土教ヲ布キ阿彌陀ノ功德ヲ教ヘ衆庶ヲ濟度シタリシガ、ソノ時ニ際シテ各地ニ淨土堂又ハ之ニ類スルモノヲ創立シ、コレヲ以テ彼ガ地方布教ノ中心トシ一種ノ駐屯所タラシメタリ、而シテ我ガ大部庄ニモ亦淨土堂ヲ建立スルニ至レリ、コレ淨土堂ノ成ルニ至リシ因由ナリトス。

五

然ラバ俊乘房ガ本庄ニ淨土堂ヲ建立セシ年代ハ何年ナリヤト云フニ史料ニ缺クヲ以テ之ヲ明言シ得ザレドモ建久ノ初年タル事ハ疑ウベクモ非ズ、但シ今本寺ニ建久三年八月廿五日ノ日附ヲ有スル左辨官下文案ヲ所有ス、然レドモソハモトヨリ原本ニ非ズシテ後世ノ寫本又ハ抄本ナ

ルヲ以テ遽カニ斷定ヲ下シ難キガ如シト雖モ、且ツ東京帝國大學ノ出版セル「大日本史料」第四編之四ニモコレヲ引用シテ一綱文ヲ記述スレドモ、ソノ現物ニツキテ之ヲ觀ルニ極メテ新シク且頗ル省略サレタル一抄本ニシテ、其ノ果シテ原本ヲ有セシヤ否ヤヲ明知シ難キヲ以テ、本報告ニハソレヲ採用セザル事トセントス。次ニ同ジク本寺ニ建久三年九月廿七日ノ大和尚南無阿彌陀佛ノ花押ヲ有スル一下文ヲ所藏ス、前記大日本史料亦何等ノ疑義ヲ插ズシテ之レヲ引用シ、建久三年九月廿七日ノ條ニ「僧重源、播磨國大部莊ニ淨土堂及ビ藥師堂ヲ建テ、莊内ノ地ヲ割キテ、之ニ寄附ス」ノ綱文ヲ立テタリキ。然レドモ本員ハ去夏同寺ヲ問ヒテ親シク原本ニ接シタリシガソノ文書ノ形式ト云ヒ、ソノ内容ト云ヒ、ソノ字句ト云ヒ、ハテハ重源ノ花押ニ少シモ筆勢ノナキ事ト云ヒ、多大ノ疑點ヲ插ミツ、以テ今日ニ及ベリ、或ハ正シキ原本アリテソレヲ後世ヨリ寫セシモノカトモ思ハレザルニ非ルヲ以テ、サレバ茲ニハタバ參考ニ資センガタメニ、ワザト全文ヲ引用シ置クベシ、蓋シ本員ハソレノ眞僞ヲ何レトモ斷定シ能ハザルヲ以テ、ソノ内容ニ對シテハ多大ノ未練ヲ抱キツ、アルモノナレバナリ。

下 東大寺領播磨國大部御庄 造東大寺大勸進

可早寄附鹿野原荒野南無阿彌陀佛別所、即爲寺沙汰、致開發、以其地利宛用淨土堂並藥師堂佛聖燈油及不斷念佛衆相節等事

右當庄内有數多之舊寺、併以破壞、雖須加皆悉修理、本寺造營未終功之間、餘營無隙、乍見之亦不致修復者、恐罪報難遁者歟、因茲、ト當庄東北字鹿野原片端、取集朽殘道具、構立佛閣一宇、安置數鉢佛像、其別所號南無阿彌陀佛寺、其堂藥師、又新加立淨土堂一宇、奉安置皆金色阿彌陀丈六三尊立像、即相語三十口淨侶、勤行不斷高聲念佛、所奉祈聖朝安穩御願圓滿、自他法界滅罪生善之由也、仍爲宛用其佛聖燈油並念佛衆衣食等、割分鹿野原一所、永寄附堂領、件所往年已來、爲常々荒野、無寄作之人、徒爲猪鹿栖、失地味、而今寄附彼用途料、始所致開發也、然者、所當年貢不及欠減者、寺用相勤、豈有闕如乎、故停止官物已下万難公事、雖經永代、不可庄役落、當爲一圓堂領矣、但後代若有不當院主住僧等、以此處或寄附權門領、或付他門末寺者、庄民訴申本寺、可停止件牢籠、若又爲庄家被顛倒寺領、令混庄役、院主以下住僧等、言上子細於本寺、可停止其濫妨也、凡寺家者、致庄家之祈禱、庄家者爲寺家依怙、各致和順之思、偏可存氏寺之由、抑當庄者、終以可爲東南院進止、而若自院家被致其妨、佛聖燈油念佛衆相勤等令違亂者、奏達子細於公家、可令落居之也、愚身忝朝家無雙之大厦、奉致隨分之忠勤、縱雖不爲在生訴訟、爭不預勅許乎、兼又號本寺下知、稱權門沙汰、橫以無惡不造濫行、不善之輩、努々不可執行寺務、只以住僧之中淨行兼濟之類、讓其職、敢莫諍論師資相承戒牒年庸矣、抑若向後院主住僧、若庄務奉行之輩中、違背此狀類出來者、是則佛道魔緣、寺家怨敵也、兩堂三寶守護善神、令與冥顯之罰、現世受白癩黑癩身、後世墮無間地獄底、無出期者、庄官百姓並住僧等、宜承知勿違失、仍所仰如件

建久三年九月廿七日

大和尚南無阿彌陀佛（花押）○重源

サリナガラ茲マデ記シテ且ツ之ヲ仔細ニ讀ミ行カバ、其ノ文章ノ拙劣ナル事、ソノ語法ノ野卑ナル事、又文意ノ通ゼザル箇所アル事等ヨリシテ吾人ノ之ヲ僞文書ニ非ザルカヲ疑ウノ無理ナラザルヲ悟ルニ至ラン。

乍併、其後建久五年ノ頃ニ至リテ本寺ガ大部庄ニ存在シタリシ事ハ、本寺所有ノ鉦鼓ノ背面周縁ニ陰刻セラレタル銘文ニヨリテモ明カニシウベキ事ニ屬ス、即チ（圖版第四）

（右）東大寺末寺播磨淨土堂

（左）建久五年十月十二日

トアリ、南都東大寺ノ寶庫ニモ本鉦ト殆ンド同型ノ鉦ヲ秘藏シツノ背面周縁ニ（右）「東大寺末寺渡部淨土堂迎講鉦鼓五之内」（左）「建久九年二月二日大和尚南無阿彌陀佛」トアルモノアル事ヲ併セ考フル時、コノ種鉦鼓ハ重源ノ好ンデ使用セシモノナル事ヲ知ルベク、渡部淨土堂又重源ノ創立スル所ナル事、作善集ニ明記スル所ナリ、ナホ淨土寺塔頭歡喜院ノ所藏文書中ニ建久五年十月十五日造東大寺勸進南無阿彌陀佛ガ佛舍利三粒ヲ東大寺末寺播磨國大部庄淨土堂ニ奉安置スル由ノ記事アルモノアリ、コレ又本寺ガ建久五年ニハ既存セシ事ノ一傍證タルベキナリ。

六

カクテソノ姿ヲ史料ノ上ニ現シタリシ淨土寺ハ正治二年八月ヲ以テ後鳥羽院ノ院廳下文ヲ得テ御祈願所ニ加列セラル、ニ至リ、茲ニ初メテ一寺ノ面目ヲ施セリ、即チ左ノ東大寺文書ハソレナリ。ヤ、頗ハシキ嫌アレドモ、本寺史ノ上ヨリ重大ナルモノナルヲ以テ、必要ナル限リヲ引用シ置クベシ。

院廳下

播磨國大部庄內淨土堂所司等

可任東大寺大和尚重源申請、以當堂、爲御祈禱所事

堂壹宇

一丈六尺背金色立像阿彌陀佛一軀

八尺背金色立像觀音勢至各一軀

右彼重源去四月日解狀備、謹檢案内、行基菩薩昔爲東大寺知識勸進上人之間、造營若干堂宇佛像、祈請寂願之果、遂尋其古風、今大和尚重源亦造立件佛像等、奉祈御願之成滿、然間、仍舍那金色堂宇棟櫓復舊儀、即被遂行供養大會畢、是則祈請相叶佛意、不背神慮之所致也、仍以件別所堂寄進一院御祈願、欲奉祈天長地久寶壽長遠之由矣、抑彼淨土堂丈六立像、有殊勝靈驗、所課或有限類之中、乍向佛前不及拜見、或有生盲者之中、參詣此堂忽明眼也、其靈瑞猶如東大寺大佛、末代希有之勝事也、尤可爲御祈願所哉、望請天恩、因准先例、以件堂可爲一院御祈願所之由被成下廳御下文者、將至于未來際、爲不退之御願矣者、任重源申請、以彼堂永爲御祈禱所、可令奉祈仙算之狀、所仰如件、所司等宜承知、不可違失、故下

正治二年八月 日

主典代右衛門少尉兼春宮憲信

在判

別當內大臣兼皇太子傅右近衛大將源

在判

（以下院司廿七名連署、略シ）

正本ニ非ズシテ案文ナルヲ以テ文意ノヤ、不明ナル所アレドモ本寺沿革史上ノ一時期タルハ明

カナリトス。

カクノ如クシテ建立セラレタル淨土堂及ビ藥師堂ハサキニ引キシ文書以下ニヨリテモ推知シ得ベキ様ニ、宋人陳和卿ノ手ニヨリテ建築セラレタルモノニシテ、ソノ如何ナル點ニ特色ヲ有スルモノナルカ。

建築史家ハ藥師堂ヨリモ寧ロ淨土堂ノ方ヲ以テ所謂天竺様ノ好例ト見做セルヲ以テ、主トシテ淨土堂ニ就イテ記サンニ、天沼博士ニ從ヘバ、淨土堂ハ建久四年ノ創立ナレドモ、ソノ後焼失シ、現存ノモノハ室町時代ニ再建セラレタルモノナリトス、然レドモヨクソノ最初ノ手法ヲ保存シ、三間三面寶形造本瓦葺ノ建築ニシテ科栱ハ三手先、極鼻ハ鼻隱板ヲ打チ、タメニ和様建築唐様建築ニ軒ノ如キ賑サヲ缺ク、堂ノ周圍ハモト椽ヲ廻シタリシガ今ハ兩側面ノ後部ニソノ痕蹟ヲ止ムルノミ。更ニ一步内部ニ入リテ建築ノ細部ヲ窺ヘバ、挿肘木、遊離尾極、丸桁、極鼻隱板、三重ニ配置セラレタル繫虹梁、圓束、錫杖彫、隅ノ扇極等ミナ天竺様ノ代表的ナル型體ヲ示シ、殊ニ天竺様ニ於テ始メテ出現セシ「二ツ斗」ト、且ツソノ餘リニ自由奔放ナル配置法ハ他ノ天竺様建築ニモ類ヲ見ザル程ニシテ、コレ淨土堂ノ有スル最モ特色附ケラル、モノナリ。圖版第二ハ藥師堂ノ内部ナレドモ、ソノ手法ニ於テ淨土堂ノソレト異ル所アルニアラザレバ、以テソノ大體ヲ察シ得ベシ。(編輯者註―追加圖版第三五及ビ第三六參照)

現今天竺様建築ト云ハル、モノハ東大寺南大門、醍醐寺經藏、外ニハ本寺淨土堂ヲ措キテ他ニ之ヲ求ムベカラザルモノニシテ天竺様ナルモノハ俊乘房重源ガ東大寺大佛殿再建ニ際シテ折カラ來朝セル宋人大工陳和卿ヲシテ工事ニ當ラシメ以テ採用セル型式ニシテ、彼ハ先ヅソレヲ東大寺大佛殿及ビ南大門ニ用ヒ、彼ノ巡錫地ニ傳播サレ、彼ノ建立セシ「別所」「淨土堂」等恐ラクソノ形式ニ依リシモノナランモ、今ハ僅カニ三例ヲ殘スニスギズ。文化ノ中心地ヨリ遙ケキ小野ノ山奥ニ、コノ特殊ノ遺構ヲ保有スル事ニ於テ、既ニ本寺ノ意義ハ充分ニ盡クサレタリト云フベキナランカ。即チ南都ニ輝キシ最新輸入ノ支那文明ハ遠ク飛ンデ大部ニ移植セラレ、當時ノ人々ヲシテ驚異ノ眼ヲ放タシメタリシハ大凡想像シ得ル所ナリトス。サレドモソノ當時當地方ノ文化ガ果シテコノ新輸入ノ文明ヲ了解シ得タリシヤヲ思ウ時、本寺ガ地方開拓ニ與リテ大ナル寄與アリシ事ハ大ニ之ヲ認ムベキモ、ソノ地方文化ヲ開拓スルニ當リテ、天竺様ナリシタメニ、特ニ非常ノ影響ヲ與ヘシ事ハアラザリシナルベク、折角ノ珠玉モソノ光輝ヲ草深キ田舎ノ土ニ埋マレシナルベシ。ナホ本堂即チ藥師堂ト共ニ特別保護建造物ニ指定セラレ、ソノ本尊阿彌陀如來兩脇士立像マタ何レモ國寶ナル事ヲ此項ニ附記シオクベシ。

七

建永元年六月四日南無阿彌陀佛俊乘房重源ハ東大寺淨土堂ニ於テ八十六ノ年薨ヲ終ヘ、メデタク正念往生ヲ遂ゲタリキ、重源ガ興隆シタル七箇所ノ不斷念佛ノ道場トハ「圓光大師行狀翼贊」ニヨレバ東大寺念佛堂、高野山新別所、播磨淨土寺、醍醐舊住道場、伊賀大佛道場、大坂渡邊道場、周防阿彌陀寺ナリト云ヘリ、即チソノ七ヶ道場ノ一ナル本寺ニ於テハ、重源上人ノ百ヶ日ニ相當スル日ニ追薦ノ法會ヲ勤修シ、ソノ結願日ナル九月十五日ニハ聖衆來迎ノ儀ヲナ

シテ以テ當寺來迎會ノ濫觴ヲナセリ、ソノ建久八年六月十五日附ノ遺言狀中ニ大部庄ノ預所職トシテ如阿彌陀佛及ビ觀阿彌陀佛ノ兩人ヲ以テ補任スベキ事ヲ助言シタリシ事ハ既ニ言及シタル所ナリ。

今本寺開山堂ニ重源ノ一木像ヲ安置ス、全高二尺六寸五分ニ達スル等身座像ニシテ念珠ヲ手ニ爪繰リツ、說法ヲナセル姿勢ヲナシ、ソノ風丰全ク眞ニ迫リ、拜者ヲシテ思ハズ額カシメザレバ止マザルノ神格ヲ具有ス（圖版第五）。本像胎内背面ニ左ノ如キ墨書アリ

天福二年歲次甲午二月十日

勸進智阿彌陀佛

自南都
入堂

爲護生菩提

奉營之

其次七日不
斷念佛每
夜說法

コレニヨリテ本像ガ南都ヨリ渡リシモノナル事ヲ明カニ知ルト共ニ本像ノ御入堂ニヨリテ、嘗テ源師ヨリ念佛ヲ聽聞シテ正念往生ヲ希ヒシ人々ハ、再ビ師ノ溫容ニ接シタルカニ感ジ、七日間ノ不斷念佛ヲ修シ、毎夜說法ニ耳ヲ傾ケシモノ、如ク恐ラク當時ノ信者ニ取リテハ何ヨリノ好記念タリシナラン。ソノ南都ヨリ渡リシトノ記録ニ從ヘバ、製作ハ南都ニ於テナサレシモノトスベク、現ニ東大寺淨土堂ニ尊藏スル重源ノ木像ト比シテ非常ニ酷似セル所以モ、凡ソ察知スベキナリ。重源ノ木像ガ渡リテヨリ約二十年、建長八年ニ至リテ、ソノ木像ヲ安置シ奉ルベキ御影堂ノ工成レリ、ソハコノ木像ノ臺座ニ

「御影堂造立次第

建長六年才次甲寅三月十七日

棟上也

建長八年才次丙午四月廿九日

奉渡處也

大工 正延

ノ墨書存スルヲ以テ知ルベキナリ。而シテ現在使用シツ、アル御戸帳ノ背面ニ、墨書ニテ

「御開山俊乘上人五百五十年遠忌

寶曆五乙亥年三月四日ヨリ十五日マデ

來迎會勤行之砌造立

極樂山淨土寺

衆徒中」

トノ記録アリ、寶曆年間五百五十年ノ遠忌ヲ勤メシ衆徒ノ努力ト、死後如此キ久シキ澆季マデソノ芳流ヲ殘セシ俊乘房上人ノ遺徳トハ、今日ノ參詣者ヲシテ跪坐禮拜セシムルニ充分ナルベシト信ズ。

八

コレヨリサキ、大部庄ヲ俊乘房ノ口入ニヨリテ後白河院ヨリ下賜サレタリシ陳和卿ハ、大部

庄ニ就キテ非違ヲ企テタリト見エ前掲隨心院文書元久三年四月十五日後鳥羽院々廳下文ニソノ事ヲ記セリ、ソノ大意ヲ抄出セン。

大部庄ハ（伊賀國阿波廣瀬山田有丸、周防國宮野庄ト共ニ）勸進上人重源ガ顛倒ノ寺領又ハ沒官地ヲ申請ケテ彼ノ建立シツ、アル寺ノ寺領ニ寄進シ以テソノ造寺造佛ノ用途ニ充テタリシモノニシテ、ソノ工匠タル宋人陳和卿ニ一時之ヲ充ツ、和卿ソノ仔細ヲ熟知スルノ故ニ、造寺ノ成ルヤ早クモコレ等ノ土地ヲ東大寺領トシテ寄進ノ手續ヲ執レリ。サレバ寺家ハ直チニ事ノ由ヲ奏聞シ、朝廷又之ニ對シテ宣旨ヲ下サレテ不輸ノ寺領タル事ヲ確認セラレ、此等庄々ノ地利ヲ以テ各種佛事ノ料タラシムベキ由ノ院廳下文ヲサヘ下サレタリシナリ。其中、宮野一庄ノミハ特ニ和卿ニ預ケ賜ヒ餘人ノ口入ヲ許サレザル事トナル、然ルニ和卿近年頗ル非違甚クシテ莊務ヲ亂リ、所當年貢ノ如キ些カモ送進セザルヲ以テ、重源ソレニ對シテ催促ヲ加ヘシ所、偏ヘニ私領タリトシ甲乙ノ強緣ニ附キテ寺領ヲ押取セントシ且ツ重源ヲ譏誣スル事切ナリ、和卿ノ猛惡不當、喻ヲ取ル物ナク、凡ソ和卿ノ作法タルヤ嗔恚驕慢增感ノ上、嫉妬狂氣相加ハルノ故ニ、ソノ不法ノ行業、舉ゲテ計フルベカラス。抑々彼ハ大佛治鑄ノ時日本鑄師ノ技ヲ妬ミテソノ鑄型ノ中ニ瓦礫ヲ投入セシ事モアレバ、佛殿造營ノ始メニ數丈ノ大柱ヲ切りテ私ノ唐船ヲ作リシ事モアリ、或ハ裳層ノ垂木ヲ拔取ル等、少シモ源上人ノ命ヲ用ヒザリシモノニシテ、當時彼ノコノ惡ムベキ態度ヲ見ルモノ頗ル之ヲ恠シミ、東大寺造營ノ遲怠、職トシテ和卿ノ自由亂行ニ依ル、ソノ事、每人之ヲ知り、寺中隱レナキ事ナレドモ、シカモ彼ヲ優恤シタリシハ一德ノ優レタルモノアルヲ以テ、萬過ヲ顧ミザリシナリ。然ルニ年序已ニ久シク、寺家ノ木工既ニソノ技ヲ磨キ彼工等ハ全ク不用ニ歸シタル上、上人ノ命ニ背キ、失錯出來ノ故ニ、今ニ於テハ彼ノ一德已ニ闕クモノニシテ、抽賞ニ足ラザルモノ歟、要スルニ恩寵其身ニ過ギ狎狎其ノ度ヲ超エ、其上ナホ種々ノ謀計ヲ構ヘ、強緣ニツキ、領知ノ秘計ヲ廻ラスモノ、違勅ヲ思ハズ冥罰ヲ恐レザルノ甚シキモノナリ、サレバ往昔ハ一分ノ助緣アルニ似タリト雖モ、正法資緣ヲ妨グル今ハ已ニ三寶ノ怨敵タリ、早ク件庄々ニ對スル和卿ノ濫妨ヲ止メ建久九年ノ院宣ニ任セテ顯密佛事用途ヲ退轉スベカラザルモノナル事ヲ命ジ給フト。

以上ノ如キ和卿ガ東大寺造營ニ際スル惡行、些カ寺家ノ陳狀ニ誇張ノ言アリトスルモ、日本工人トノ間ノ反目嫉視ノ事絶無トハ云フベカラズシテ、恐ラク前述ノ如キ非道ノ事アリシナラシ、東大寺再建ニ際スル思ヒカケザル困難ノ一面ヲ知ルニ足ルベキナリ。

元久三年四月十五日後鳥羽院廳下文ヲ以テ、如此ク大部庄以下ニ對スル宋人ノ狼籍ヲ停止シ給ヒシガ、果シテソノ効力ヲ發揮シ得タリシヤ否ヤヲ確知スル暇モナク六月四日重源ハ不歸ノ旅路ニ登リシ事、前項ニ述ベタリ。

重源ノ後ヲ嗣ギテ淨土寺第二世トナリシ觀阿彌陀佛ハ俗姓大江氏、京都ノ人ニシテ實ハ重源ノ甥ナリト云フ、養和元年重源東大寺奉造ノ勅宣ヲ受ケシ時、觀阿ハ師ヲ助ケテ事ヲ幹シ、諸州ニ勸進シテソノ工ヲ成サシメシガ、後建久三年師ノ命ニヨリテ大部庄ニ歸リ、淨土堂ノ建立ニ専ラ力ヲ竭シ、淨土堂ノ成リシハ實ニ觀阿ノ信力ニヨル、本寺實際上ノ開祖タリ、仁治三年

十二月二十五日七十八ノ高齡ヲ以テ光雲ニ掩ハレ異香薫レル中ニ大往生ヲ遂グルマデ、日課トシテ稱名三萬遍、三時禮懺、一日トシテ怠ル事ナク、道俗ノ誘導洽ク及ビタリト云ハル、寺中西北ノ淨地ニ葬リ、九層石塔及ビ五輪塔ヲ建テ、ソノ標トス。今本寺ヲ去ル西北一町許ノ小丘ニ開山及觀阿ノ墓所ト傳フル一墳塋アリ、圖版第三圖左ハ即チソレニシテ、寺僧ハ六重ノ塔ヲ以テ開山ニ宛テ五輪ヲ以テ觀阿ニ宛ツレドモ、本寺ノ舊記ニヨレバ共ニ觀阿ノモノタルベク、現存六重塔婆竝五輪塔婆共ニソノ上部ハ他塔ノ一部ヲ重ネシモノタルハ一見之ヲ明カニスル所ナリ。

又本寺別ニ觀阿自筆ノ契狀及ビ言上狀ヲ秘藏ス、(圖版第六)左ニ之ヲ掲グベシ。

自長井殿、觀阿彌陀佛給大部庄田伍町内參町所當田並淨土堂本坊壹宇事、於田者明春勸農之時、可令計宛、至于本坊者、先如元可令歸住之狀如件

建保五年十一月十一日

法橋上人位(花押)。觀阿

大部御庄官中

觀阿彌陀佛言上

欲殊申賜寺内荒野六段、致開發、宛用當寺本願聖靈南無阿彌陀佛御忌日並每月月忌僧供用料事

右本願上人者、云本寺造營、云當寺建立、勵隨分微力、被成若干大營了、奉公越諸人、忠節過傍輩、尤以可被宛置件遠忌用途料之處、年來全以無其沙汰、僅相當彼期日、住僧等如形雖相繼、定及闕意者歟、仍先預所訴申此子細之處、先預所如阿彌陀佛開發寺内便宜荒野、可充用御忌日用途料之由、被成下文了、依之、住僧等各以坊中後園、令開發田代之處、當作及三四段歟、同者賜當時御下文、欲令備後代證文、加之、於月忌者、雖年來相營、自今年正月、殊相語持經者十人、同音十部法花、令轉讀、且上御祈禱也、且寺中繁昌也、爭無御隨喜哉、然者、任先規預所下知之狀、申賜寺荒野、欲充用御忌日並每月月忌僧供用途料、仍言上如件

承久三年三月 日

觀阿彌陀佛

第二通目ノ文書ニヨリテ、サキニ舉グシ重源讓狀ニ、大部庄ニ如阿ト觀阿トノ二人ノ預所職ヲ補セシ由來モホハ明カニシ得ベク、即チ如阿ナルモノハコノ地方ノ有力者ニシテ且ツ淨土教ノ信者ナリシガ如ク、最初預所トナリ、後ニ觀阿ニソノ職務ヲ讓リタリシト見ユ。

ソノ後コノ月忌田ニ就テハ次ノ如キ衆徒ノ定置アリテ月忌修理田ヨリノ收入減少ヲ阻止セント努力セシ痕ヲ止ム。(圖版第七、上)

定置

御月忌田修理田等斗代事

右於彼田代等者、或號不作、或稱損田、令寺納減少之間、自當年者、可辨濟段別壹斗五升此内段別七合、但大旱魃之時者、準原方可有評定者也、仍衆議如件

文保三年四月九日

年行事文了(花押)
惣行事尺廻阿

財 阿(花押)
阿(花押)

九

ソノ後大部庄ハ久シク東大寺東南院ヲ領家ト仰ギタリシガ、永仁六年ノ頃ニハ東大寺直接ノ支配ニ歸シタル事モアルシク、○東大寺文書、永仁六年六月日、大部庄百姓解案或ハ東法華堂領トモナリ、○同上、貞和二年四月日、惡黨注文或ハ戒壇院領トモ言ハレ、○同上、嘉吉元年十二月廿九日某折紙テ、ソノ所屬ノ變更一再ナラザリシガ、又他方ニ於テ鎌倉時代末期ヨリ室町時代ニカケテ東大寺八幡宮領トモ稱セラル、ニ至レリ、○同上、至徳元年十月十七日、左衛門佐奉御教書例ヘバ東大寺文書永仁三年二月日ノ東大寺三綱大法師等解案ニヨレバ「右當庄者、吾寺八幡宮之神領、重色諸供料之用處也、所謂社壇二季之御八講内大佛兩界之供養、同不斷之最勝講、戒壇院受戒料、法花中門之往來供、神殿長日之宿直役」等ハミナ此庄ノ土貢ヲ以テ支ヘ來ル所ナリト言ヘルガ如キノレニシテ、今本寺ニハ淨土堂藥師堂ノ中央ニ當リ南面セル八幡社一字ヲ存ス、寺傳ニヨレバ嘉禎元年冬ノ創立トス、蓋シ信ズルニ足ルベク、東大寺領ニ東大寺八幡宮ヲ迎フル事、他ニ類例多キ事ニ屬ス、現在スル社殿ハ三間社流造ニシテ檜皮葺、棟上千木堅魚木ヲ載セ、屋根ノ流レ緩ニシテ軒端反リアリ、鐵麗ナル繁樑ヲ分布シ、頭貫ノ木鼻ニ繪様ノ彫刻アリ、手挾竝ビニ蔓股ノ彫刻共ニヨク室町時代ノ特色ヲ發揮スルモノアリ。ソノ前面ナル拜殿、七間三面單層四注屋根本瓦葺、軒ニハ粗大ナル一重樑ヲ延ブ、各木鼻ノ線形ニ唐様ノ手法ヲ存シ、双斗肘木ハ觀心寺ノソレノ如クナラズシテ一種ノ繪様彫刻ヲ有シ、大體ノ形式手法ハ唐様天竺様ニ加フルニ觀心寺様ヲ以テスル極メテ珍奇ナルモノトスベク、且ツソノ細部ノ手法ハヨク鎌倉時代ノ特色ヲ備ヘタリ。現存ノモノハ大部分近年ノ補修ニ成レルモ、本社創立時代ノ鎌倉中期ニアル事ヲ標識シテ充分ナルベキモノナリ。社殿ト共ニ、特別保護建造物タリ。



第一圖 小野町及平莊附近地圖

一〇

東大寺所藏文書中ニ正安四年七月日東大寺衆徒解案及ビ乾元二年八月日東大寺衆徒解案等アリ、ソレ等ニヨレバ鎌倉末期ニ於テ、淨土寺ノ住僧卿阿已下ノ輩ガ動モスレバ寺領ヲ押領シ本寺ニ敵對シ、院宣ヲ申掠メタリシヲ以テ、東大寺ヨリハ八幡宮神人以下寺家公人等ヲ差下

シテソノ非違ヲ糾彈セシメントセシガ、大部庄ノ住民等ハ淨土寺ノ住僧ニ相語ハレ、寺家ヨリ差下ス所ノ神人以下ヲ負傷セシメ、且ツ本庄ハ重色ノ社領ニシテ守護使不入ノ土地タル事右大將家御下知柄焉タルモノアルニ拘ラズ、當寺ノ住侶ハ當國守護代高橋三郎ナルモノト相語ラヒテ庄内ニ亂入シ御供米以下神物ヲ穢ス事ガ多カリシカバ、寺家ヨリハ頻リニソノ事ヲ朝廷ニ出訴ニ及ビタリシガ如ク、寺領ノ保全又ナカ／＼容易ナラザリシガ如キモ、サレドモ又常ニ八幡宮領トシテ絶エズ爲政者ノ保護モ加ヘラレ、室町時代ニ入リテハ特ニ將軍家ノ八幡宮信仰ノ餘慶ハ當寺ニモ及ビ、度々寺領安堵ノ御教書ヲ下サレタルモノ東大寺文書中ニアリ、左ニ掲グルモノハソレニ關聯スルモノニシテ塔頭歡喜院ニ襲藏サル、文書ノ一部ナリ。

一 赤松家下知狀案

一通

賀東郡淨土寺事、爲御祈願所、自往古諸役免許處、近年號礼物及其責云々、太以不可然、所詮早任先例旨被聞訖、彌可被抽祈禱誠之由候也、仍執達如件

文明十五

十月五日

景 能 在 判

則 家 在 判

則 伊 在 判

二 赤松家下知狀

一通

賀東郡内淨土寺事、爲御祈禱所上者、號諸被官人足輕中間小者、押入坊舍民屋、致狼藉族在之者、注交名、急度可有注進、然者即可被處罪科之由候也、仍執達如件

文明十九

八月十七日

則 宗（花押）○赤松氏

淨土寺行事坊

三 小寺則識書狀

一通

賀東郡内淨土寺領淨土寺領段錢臨時課役等事、御代々被成御免除之上者、不可有相違、彌可被抽精誠懇祈候也、恐々謹言

天文十辛丑

十二月十日

小寺藤兵衛尉

則 識

當寺

衆徒御中

四 豐臣秀吉折紙（圖版第七）

一通

淨土寺百姓之内令逃散□□荒地共在之由候、尤候、百姓共早々召返、料作可申付候、下々不謂儀、不可有之候、恐々謹言

天正七

十二月十日

藤吉郎

秀 吉（花押）

淨土寺

和泉殿

五 最末等三名連署折紙

一通

第一 淨土寺

尙々、以來之儀者、以前筋目とく、取沙汰可然候、以上
今度儀御來迎取定候處、無別儀相調候、然者久敷御來向無之候間、道具共遅々仕候間、只今
大儀重々付而、西之堂さい錢寄進候事、兩三人申請候條、以來ハ先年之筋目別儀有間敷候、
爲其狀如件

天正十八年
九月十日

庄 圓(花押)
藤 左(花押)
最 末(花押)

馬場中
年行事

六 板倉勝重書狀

以上

一通

其地加藤郡之内淨土寺と申御朱印所等之坊と申出、寺中ニ惡僧有之由、我等親子所へ目安を
指上申候、併於爰元、以前申儀ニ而無之候、只今者、其所之守護御やう候て、從者をハ急度
被仰付御掟ニ御座候間、双方被召出目安之由御尋、惡僧をハ自様子、其所を追放可然存候、
右之通九近殿へも以書狀申旨有之候間、御心得候、恐々謹言

八月廿八日

板伊賀守

勝重(花押)

春日淡路守殿

宮坂七〇殿

參

コレヲノ文書ハ何レモ室町時代乃至徳川初期ノ當寺ノ有様ヲ暗示スベキ史料タルヲ以テ、本委
員ハ敢テ秃筆ヲ呵セザルベシ。

一一

本淨土寺ガ東大寺末寺トシテ、ソノ寺領大部庄ヨリ南都へ幾何ノ年貢ヲ貢進シタリシヤ、ソ
ノ正確ナル數ハモトヨリ知ルベカラザレドモ、東大寺文書永仁三年正月日及同年閏二月日大部
庄百姓等解狀案ニヨレバ乃貢三百斛ニシテ年貢莫大ノ料所ナリトアルヲ以テ其大概ヲ知ルニ足
ルベク、又本寺所藏文書中ニアル天正八年九月朔日ノ羽柴秀吉ノ折紙案ニヨレバ當郡内三百石
ヲ以テ付ケ置クトアルモノアリ、大凡三百石ノ收納アリシガ如キガ、ソノ實收高ハ如何ナリシ
ヤ、東大寺文書中ニ永正年間ノ櫛橋若狹守伊成ノ年貢送進狀數通ヲ有ス、ソレニヨレバ

永正三年十月廿八日 奈良着 三十貫
永正四年三月廿七日 奈良着 二十貫
永正七年十月十六日 奈良着 三十貫
永正七年十二月十七日 奈良着 七十貫
永正十六年十月十六日 奈良着 五十貫

ノ收入アリ、モトヨリソノ年度内ノ貢納ヲ皆納シタルモノニ非ルハ勿論ナレドモ、永正ノ頃ナ
ホコノ收納アルヲ見テモ、東大寺トシテハ捨テ難キ財源ナリシガ如シ、ナホ東大寺文書ニ收ム
ル建武四年及ビ曆應三年ノ大部庄ノ散用狀ニ從ヘバ何レモ惣田數二百二十七町八反二十五代、
作田百六十七町二反五代トアリ、コレ又、大部庄ノ廣袤ヲ知ルニ足ラン。

二

次ニ淨土寺ニ現存スル金石文ニシテ、未ダ引クニ到ラザリシモノヲ併記セン。

一 藥師堂鰐口銘 徑四五センチ

「(右) 天文九年七月日

(上部) 増位 山」

二 疏瓦銘二面 (圖版第九)

「南無阿彌陀佛」

「南無藥師如來」

三 筒瓦銘二種 (圖版第八)

「南無阿彌陀佛」

「永祿七年_{子甲}四月二日瓦大工_{六郎左衛門尉} 甚衛門尉」

四 筒瓦破片二個 (圖版第八)

「川神左衛門尉作

□年_{子甲}三月廿八日」

「隆 昭」

藥師堂ノ向ツテ右側面ニ室町末戰國ト思ハル、花頭窓ノアルハ恐ラクコノ瓦銘ニ見ユル永祿七
年頃ニ修覆ヲ加ヘラレシ時ニ附加セラシモノニ非ルカ、後考ヲ俟ツ。

三

以上十二頃ニ分チテ記述セル所ハ、要スルニ東大寺領タル大部庄ニ東大寺ノ末寺タル淨土寺
ノ建立セラレシ事ハ寺院ガ地方ニ所有スル寺領ヲ統制スルタメニ必要缺クベカラザル組織タレ
バ、決シテ異トスルニハ足ラザレドモ、本淨土寺ガ俊乗坊重源ニ深キ關係ヲ有シ陳和卿トモ聯
繫ヲ有スルタメニ、鎌倉初期ニ我國ニ傳ハリシ天竺樣建築物ヲコノ山間ノ阪邊ニ殘存セシ事ハ
最モ注目スベキ事ナリトス。且ツ本寺ガ重源ノ木像ヲ所藏シ、重源寄進ノ舍利塔ヲ有シ、重源
愛用ノ鉦鼓ヲ有スル事ハ、他ノ南無阿彌陀佛別所又ハ淨土堂ナルモノ、大概ヲ推知シ得ベキモ
ノナリトス。更ニ最モ必要ナルベキ考察點ハ、淨土堂創立ガ大部庄ノ土地ヘノミナラズ上流加
古川附近ノ文化ニ與ヘシ影響、言ヒ換ヘルナラバ淨土寺ヲ中心トセル文化圈ノ如何ナルモノナ
リシヤニ存スレドモ、本員ハ今遽カニソレヲ斷定シ難キヲ遺憾トシ、更ニ他日ヲ期スルノ外ナ
キヲ悲シミツ、コノ筆ヲ收メントス。(中村委員)

中村委員ノ調査報告ニ記サレタルガ如ク、奈良東大寺ニ俊乘坊重源上人ノ坐像一軀（國寶）アリ。淨土堂（又、俊乘堂ト云フ）ニ安置セラレ、ソノ堂ノ本尊ト崇メラル、モノニシテ、木彫ニ成リ、丈二尺七寸三分、ソノ手法姿態等頗ルワガ淨土寺ノソレニ酷似セリ。該像ノ精細ナル寫眞版ハ「南都七大寺大鏡」（第七五集ノ第一四冊、東大寺大鏡）ニ載セラレ、又「真美大觀」（第七冊）ニモ收メラレタレバ、就イテ觀ラレムコトヲ希望ス。

〔編輯者〕

印 南 郡

第二 報 恩 寺

〔圖版第一〇——一七〕

（一）

東播ノ地由來良穀ヲ産ス。灘ノ美酒ハ實ニ是ヲ以テ醸スル所ナリ。金風玉露ヲ吹クノ交、穰々タル稻穂ハ一望萬里ノ平原ニ連亘シテ百姓擊壤鼓腹ノ豐樂アリ。此ノ平原タル、即チ東播ノ山谷ヲ貫イテ走ル加古川ガ春風秋雨幾千歳ノ鏤刻ニヨツテ成レル平野ナリトス。蜿蜒二十餘里ニ亘リ逶迤タル河流ノ發祥ハ、日本古代ヨリノ文化發展ト密接ノ交渉アリ。加古川ガ早ク山陰山陽連絡ノ古代交通路ヲ作り人文發展ノ楔トナリシハ自然ノ數ニシテ、針間鳴國印南野鹿子ノ水門ノ諸地ハ此河流ノ沿岸ニ發達シ、史籍ニ載スルコト最モ古シ。是ヲ現今ニ殘レル遺跡ニ徵スルニ酒見神社^{註1}・佐保神社^{註2}・清水寺^{註3}・光明寺^{註4}・淨土寺^{註5}・鶴林寺^{註6}・一乘寺^{註7}ノ諸社寺ノ開創セラル、所以ヲ考フル時、牽ヒテ此ノ豐穰ナル美田ノ有スル經濟的根據ヲ聯想セザルヲ得ザル所以ナリトス。

註1 播磨國加西郡北條町

2 同 加東郡社町社

3 同 加東郡鴨河村平木

- | | | |
|---|---|-----------|
| 4 | 同 | 加東郡瀧野町光明寺 |
| 5 | 同 | 加東郡小野町淨谷 |
| 6 | 同 | 加古郡鳩里村北在家 |
| 7 | 同 | 加西郡下里村坂本 |

(11)

報恩寺ハ播磨國印南郡平莊村山角ニアリ。省線加古川驛ヨリ分岐スル播丹鐵道ノ神野驛ヲ降リ西行、渡舟ニヨツテ加古川ヲ渡レバ即チ山角ノ部落ニシテ、寺ハ小丘ノ一端ニ南面ス。南望スレバ加古川ノ清流眼下ニ走り、西南方ニハ高サ百米突内外ノ獨立丘陵ヲ隔テ、印南野ノ沃野ニ連レリ。

寺ハ今眞言宗ニ屬シ（嘗テ律宗ヲ奉ジ、コトアリ）高野山寶城寺末タリ。寺傳ニヨレバ僧慈心ノ開基ニシテ、元明帝ノ和銅六年ノ建立ナリト傳フルモ素ヨリ詳ナラズ。

印南郡平莊ハ元、屏庄又幣庄トモ稱シ和名抄印南郡益氣郷又ハ含藝郷ノ故地ト想像スベク、幣庄ハ鎌倉期ニ至リ當寺ノ鎮守若一王子權現ノ草創ニ關係スルモノナルガ如シ。

當寺境内ニ金石文ノ存スルモノ尠カラズ。先ヅ本堂ノ北數百歩ノ地ニ墓地アリ。其奥マリタル處ヲ歷代住職ノ墓域トナス。其徑路ノ西側ニ當リテ七八尺許ノ五輪塔四基南北ニ並列セリ。北ヨリ數ヘテ第一第二ハ金石文ノ痕跡アレドモ磨滅甚ダシクシテ讀ムベカラズ。第三ノ塔ノ臺座ニ正和五年西曆八月日□□長老トアリ僅ニ判讀スルヲ得。其南ニ隣接セル塔ノ臺座ニハ、應永

十八年八月二日當寺第七長老利海大德ト刻セリ。

又本堂ノ西ニ當リ形態優美ナル十三重石塔婆（圖版第一〇）アリ。其臺座ノ西面セル一部ニハ常勝寺元應元年未己十一月六日トアリ。常勝寺ハ本寺ノ塔中ナリシト言フ。前記五輪塔ト十三重石塔婆トノ中間、徑路ノ東側ニ西面シテ樹タル板碑式石佛（六地藏ナルベシ、但四軀ノ佛體ヲ刻ス）ノ中間ニハ文和二年二月ト刻セリ。

又原本ニ非ネドモ、正和文保年代ノ古文書ノ内容等ニ依ツテ推測スレバ當時ニ於テ已ニ寺觀ノ整頓、寺領ノ嚴存正ニ見ルベキモノアリシヲ思ハシム。

其後赤松氏ノ赤穂郡千種川ノ谿谷ヨリ崛起シ、次デ勢威ヲ播磨一圓ニ揮フニ當リ、當寺ハ其崇敬ヲ得、此ノ緣故ニ依リテ足利將軍トモ淺カラザル關係ヲ結ブニ至レル次第ハ、後述スル所ニヨツテ明カナルベシ。而シテ永正二年二月上旬兵火ノ襲フ所トナリ註一、一山ノ坊舎什寶悉ク灰燼ニ歸セシガ、天文初頭再興ノ議熟シ伽藍ノ復興ヲ企劃セリ。天文元年僧明誓所記ノ舊記覺ニ曰ク、

播州印南郡印南山報恩寺舊記覺

印南山報恩寺

後宇多院御勅願ニテ證賢上人覺秀開基シ玉フ草創之靈地也本願覺淨禪人也

一本堂 本尊十一面觀音坐像也 脇立者四天王也塔堂藥師堂鐘樓有之

一鎮守 辨財天也 于今有之

一當所惣社若王子權現也

社務職寄進之狀別有之

一東寺聖德太子 鎮守大將軍

山角村有之

一阿彌陀堂 鎮守辨財天

同村也

一水神 大歲神

神木村有之

一藥師堂 鎮守天神

柴村有之

一觀音堂 鎮守愛宕

宿村有之

一藥師堂 鎮守伊和明神

原村有之

一觀音堂 鎮守小守

呈村有之

一藥師堂 鎮守大將軍

藥栗村有之

一地藏堂 鎮守十禪子

池尻村有之

一藥師堂 鎮守明見 小野村有之

一地藏堂 鎮守辨財天 西山村有之

一地藏堂 鎮守大歲神 中村有之

右如件

天文元^{壬辰}年八月十七日 住持 明 誓 記之

右ノ記錄ニヨリ略寺觀ヲ察スベシ。翌天文二年八月ニ至リ沙門十緣、勸進ノ事業ヲ起ス。當時ノ勸進帳ハ圖版第一六ニヨリコレヲ窺フベシ。右ノ外、勸進帳ハ十緣ノ假名書ニ係ハルモノ一通^註。筆者不明天文二年十月ニ記セルモノ一通、計三通ヲ遺セリ。寺記ノ傳フル所ニヨレバ、當時兵亂相踵ギ折角ノ企圖モ成効セザリシモノ、如キモ更ニ後年ニ至リ工成リシト見エ、寺ニ藏スル永祿十一年二月十五日ノ「播州印南山報恩律寺七堂圖」(圖版第一一)ニ據レバ

樓門 三重塔婆 本堂 食堂 辨財天 藥師堂 阿彌陀堂 經藏 浴室 後宇多院殿御廟石 廻廊

橋梁 鳥居 門客人 拜殿 若一權現

等ノ建造物明カニ描カレ、正ニ一山ノ盛觀ヲ推スルニ足ル。目下報恩寺ノ東隣ニ郷社平莊神社アリ。今祭神ハ品陀別神、大國主神、天照大神、素盞鳴尊、保食神、小守神、菅原道真公等ヲ

祀ルト雖元來ハ若一王子權現ニシテ、即チ報恩寺鎮守ノ神ナリ。神地寺域ノ維新前迄同一境内タリシコトハ現況ニヨツテモ顯然タリ、且前記永祿ノ地圖ヲ參照スル時、益々現在ノ社地ノ寺院ニ於ケル地位ヲ察スルコトヲ得ベシ。

天文ノ初、僧明誓ノ記セル舊記覺ニヨレバ後宇多天皇ノ御宇證賢覺秀ノ開基ト稱ス。略信スルニ足ルベク、若一權現ノ勸請モ或ハ傳ヘテ證賢ノ紀州熊野宮ヨリ勸請セシトイフ。其真相ニ至リテハ明徴ヲ缺クト雖蓋シ當ラズトモ遠カラザルガ如シ。

註1 本寺所藏天文二年八月沙門十縁ノ假名書勸進帳

冒頭ニ「ここに十方たんの御助成をあふひて一寺さいこうの大願望をまげんさこう狀」トアルモノ

註2 同上

(三)

本寺所藏古文書ノ中ニ左ノ如キモノアリ。「赤松殿代代御添狀」ト題シ一卷十通ヲ收ム。中ニ就キ最モ古キヲ赤松圓心ノ書狀トナス。

當寺領御安堵御教書加拜見候畢、殊以目出度候、此上者更不可有相違候歟、恐々謹言

五月六日

沙 彌 圓 心 (花押)

謹上 報恩寺長老 御房

足利將軍ヨリノ所領安堵御教書ニ對シテノ圓心ノ施行狀ナリ。コレハ恐ラク尊氏ノ御教書ニ對スルモノナルベシ。

大日本史料第六卷ノ第三冊延元元年(北朝建武三年)八月九日ノ條ニ、報恩寺古記録ヲ引キテ、一建武三年八月九日將軍御教書案寫有之、其文ニ云ク

祈禱事可被致精誠之狀如件

(厚氏) 御 判

建武三年八月九日

報 恩 寺

一同年十一月晦日卷數の御返事案寫有之、其文ニ云ク

御祈禱卷數一卷令披露候畢仍執達如件

建武三年

十一月卅日

報 恩 寺 長 老

(桃井義盛)

修 理 亮 印

トアルヲ掲ゲタリ。以テ參考トナスベシ。卷數ノ嘉納ハ懸テ寺領安堵ノ沙汰トヤナリツラン。然レバ五月六日ハ或ハ建武四年又ハ曆應元年トヤ推定スベキナランカ。圓心ノ書狀ノ遺レルモノ、僅カニ山城國山崎離宮八幡宮所藏ノモノヲ代表トシ、其數必ズシモ多カラズ。播磨赤穂郡赤松村苔繩ノ法雲寺ニ藏スル寺領四至定書ノ一通、學者猶考慮ノ余地アルヲ論ズル折柄註1當寺所藏ノモノ甚珍重スベク此意味ニ於テ大ニ紹介ノ意義アルヲ覺ユルナリ。(圖版第一二參照) 赤松圓心父子、由來官軍ニアリシガ建武二年十一月尊氏ノ相模竹ノ下ニ戰捷ヲ得テ以來、官軍ヲ去ツテ尊氏ノ麾下ニ屬シ、其帷幕ニ重キヲナセルナリ。然レバ赤松氏ガ本寺ヲ懷柔シテ恩威竝ビ行ヒ、自家勢力ノ扶殖ヲ量ルニ腐心セバ其間本寺ト足利氏トノ間ニ、淺カラザル緣故ノ

生ズベキハ自然ノ數ナリ。本文書ハ暇々ノ裡ニ其間ノ消息ヲ現ハセリト解スベキハ詮鑿ニ過ギタリヤ否ヤ。次ニ左ノ安堵狀アリ。

當寺領、不可有相違由事、御教書拜見候訖、可存其旨候、恐々謹言

觀應三年六月十四日

權律師 (花押)

報恩寺長老

權律師ハ圓心ノ三男則祐ナリ。中津川殿、帥律師、道號自天、曆應二年十月足利方ニ屬シテ武庫郡丹生山城ヲ攻畧セシコトアリ。則村 (圓心) ヲ扶ケテ終世戰場ニ馳驅シ、播磨因幡備前ノ守護トシテ、父ニ次デ赤松氏ノ興隆ニ力ヲ致セリ。應安四年十一月廿九日卒ス、五十八才。此文書ニ相應スベキ將軍ノ御教書ハ本寺ニ寫ヲ存ス。即チ

當寺領事、不可有相違之狀、如件

觀應三年三月九日

御判

報恩寺長老

ニシテ此年四月二十五日、則祐ハ足利義詮ニ屬シテ男山ノ官軍ヲ犯シ、兵馬倥傯ノ折柄ナリシニ本寺ニ對シテ此事アルハ大ニ興趣ヲ覺ユ。

次ニ赤松義則ノ安堵狀アリ。註2

當寺領事、任去年十一月九日安堵御教書旨、可被全知之狀、如件

永德三年六月十五日

兵部少輔 (花押)

報恩寺長老

兵部少輔ハ即チ義則ニシテ、赤松則祐ノ長子ナリ。左近將監上總介兵部少輔大膳太夫ニ歷任ス性松ト號シ法名圓齋ト稱ス。足利義滿ニ寵セラレ、其四職ノ一ナリ。滿祐ハ即チ義則ヲ父トシテ生ル。

次ニ赤松滿政モ亦建武以來ノ先規ニ任セテ知行分ヲ安堵セリ。

播磨國印南郡報恩寺領事、任建武觀應永德應永御下知旨、諸名田職以下於當知行分者、不可有相違候、彌可被抽祈禱候、恐々謹言

十二月廿八日

滿政 (花押)

當寺長老

滿政ハ滿則ヲ父トシ、義則ヲ伯父トスル者、赤松一族ノ系譜ヲ摘記セバ左ノ如シ。

範資

○印本寺ニ文書ヲ寄セタル者

貞範 顯則 持貞越後守

赤松則村

圓心

觀應四年正月十三日七十三歳

則祐

氏範

滿則

第三報恩寺

應安四

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

滿祐

義則

(赤松系圖ニ據ル)

義則ノ孫性存ガ子ヲ政則トナス。是レ滿祐誅ニ伏セル後ヲ恢復シタル赤松氏中興ノ祖トス。政則ハ嘉吉ノ變以後殆ンド三十年ニシテ文明二年三月五日ヲ以テ滿政ト略同ジ意ノ書狀ヲ寺ニ寄セタリ。次デ其子義村モ亦永正十八年正月十二日左記ノ文書ヲ出セリ。

播磨國印南郡報恩寺領事、任建武觀應永德應永文明御下知之旨、諸名田職以下竝尾江中島保惣領分國衙包重半名等、當知行事、永不可有相違、殊以可被抽祈禱之精誠候、恐々謹言

永正十八年正月十二日

性 因 (花押)

報恩寺長老

性因ハ即チ義村ナリ。義村ノ子晴政(初メ政村、將軍義晴ノ晴字ヲ賜ヒテ改名)又左ノ安堵狀ヲ出セリ。

播磨國印南郡報恩寺領事、任建武觀應永德應永御下知旨、諸名田職以下於當知所分者、永不可有相違候、殊以可被抽祈禱精誠候、恐々謹言

享祿四

七月十八日

政 村 (花押)

報恩寺住持

右ノ安堵狀ト同時ニ、

當寺諸公事令免除訖、此旨可有存知候也、恐々謹言

七月十八日

政 村 (花押)

報恩寺住持

トアリ。本文書ノ如キハ將軍ニテモ非ザル地方ノ守護ガ其領内社寺ニ對シテ社寺領ノ保障ヲ與ヘシヲ證スルモノニシテ守護ノ權力増大シテ莊園制度ノ崩壞ヲ來シ難テ來ルベキ封建制ノ發生ヲ見ントスルニ至ル過渡期ヲ現スモノナルベシ。^{註3}

政村(晴政)ノ子義祐モ亦祖先ノ後ヲ受ケテ同意味ノ安堵狀ヲ本寺ニ致セリ。

斯ノ如クニシテ赤松氏歷代ノ主、代ヲ累ネテ其寺領ヲ安堵ス。當時或ハ此地方必ズシモ其例ニ乏シカラザリシトスルモ、而モ現代ニ其遺物ヲ存スルハ蓋シ比稀ナルベシ。吾人ガ特ニ注意スル所以モ亦コ、ニ存ス。

^{註1} 魚澄惣五郎氏「歴史地理學上より見たる播磨千種川の溪谷」(雜誌「國史と國文」昭和三年十二月號)

^{註2} 永德二年十一月九日將軍義滿御教書寫、應永十八年八月六日將軍義持御教書寫ノ報恩寺ニ存スルコト大正五年

發行增訂「印南郡誌」前編寺院報恩寺項中ニ記載セラル

^{註3} 魚澄惣五郎氏「日本文化史、室町時代」土地制度ノ變遷(三八―四一頁)

(四)

更ニ寺中文書ノ中、特ニ注意スベキヲ報恩寺奉加帳六冊トナス。右ノ内最モ重要ナルハ外題ニ「報恩寺奉加帳」トシ卷頭ニ左大臣ノ署名アルモノトナス。コハ竪一尺一寸四分、幅五尺一寸、折本仕立、見返シニ竹葉模様アリ、箔貼ヲ施ス。内面ハ縱横ノ線ヲ畫シ第一ニ「左大臣」ト書シ花押アリ。正ニ足利義教トナス。四行ヲ隔テ、右京太夫、一行ヲオキテ尾張守、二行ヲオキテ治部大輔、三行ヲオキテ性具トアリ。

僚友渡部委員ノ研究^{註1}ニヨレバ右京大夫ハ細川持之、尾張守ハ畠山滿家（推定）治部大輔ハ斯波義淳（推定）性具ハ赤松滿祐トナセリ。而シテ其絶對年代ニ付テハ、義教ノ左大臣在任ハ公卿補任ニヨリ永享四年八月廿八日、一條兼良ノ後ヲ承ケテ就任セシヨリ永享十年八月廿八日ノ辭任ニ至ルマデ滿六ヶ年トシ、一方人物推定ノ誤ナクンバ、滿家ハ永享五年九月ニ、義淳ハ永享五年十二月ニ歿セルニヨリ、奉加帳ニ筆録セシ年代ハ永享四年八月義教ノ左大臣ニ任ゼシヨリ翌五年九月滿家ノ死亡ニ至ル一ヶ年餘ノ間ニ在リト定メタリ。此説從フベシ。

因ニ性具ハ既記赤松義則ノ子、左京大夫ニ任ズ。父卒シテ播磨ノ守護タリ。支族持貞ノ事ニ付テ將軍義持ト意合ハズ、應永三十四年十二月剃髮入道シテ性具ト稱ス。而シテ永享元年義教ノ將軍トナルニ及ビ再播磨ヨリ出デ、京ニ仕フ。嘉吉元年同族貞村ニ係ハル領地ノ問題ニ關連スル義教ノ處置ヲ憤リ、許リ迎ヘテ自邸ニ導キ、遂ニ之ヲ弑ス。コレヨリ滿祐播磨ニ歸リ城山城ニ幕軍ト防戦セシガ遂ニ山名持豐ノ爲ニ破ラレ嘉吉元年九月十日誅死ス。時ニ六十一歳（赤松系圖六九）ナリ。滿祐ノ將軍義教弑殺ハ、牽テ幕府權力失墜ノ素因ヲ作り、其間諸豪族ノ崛起トナリ、遂ニ應仁ノ大亂ヲ醸成スルノ氣運ニ向ヒシナリ。コレヲ思ヒ彼ヲ偲ヒテ此ノ奉加帳ニ對スル時、吾人ハ室町亂世ノ世相ガ此一紙ニモ進リ流ル、ヲ觀ジ、湧然タル史興ヲ感ゼズンバアラズ。

他ノ奉加帳ノ内三冊ハ前ト略同シ形式ナルモ其裝飾稍劣レリ。「播州平村報恩寺奉加帳」ト題スルモノ二冊ノ内

沙彌（花押）
教弘（花押）

槽屋
因防守

別所
祐秀（花押）

ト記セルモノ一冊、

伊豆守（花押）

木村石見守入道
沙彌道久（花押）

掃部助（花押）

上月

越中守（花押）

沙彌（花押）

賀古但馬

沙彌建春（花押）

左衛門尉信長（花押）

ト記セルモノ一冊アリ。他ノ三冊ニハ

○壹石 高橋道順

五斗 同少將

。以下畧

右一通

○奉加帳 次第不同

壹貫文 六郎大夫

三百文 畏九郎左衛門

。以下畧

○鐘鐺奉加帳 次第不同

右 一冊

右 一冊

以上六冊ニシテ、何レモ此地方ニ於ケル摺紳階級ノ寄進ヲ記入セルモノナリ。最後ノ二通ハ他ノ四冊ニ比シテ年代下レルヲ覺ユ。如上ノ内第一冊ハ將軍以下、當時要路ノ大官ヨリ寄進ヲ得タル明證アリ、國史ノ本系ニ關連ヲ有シ赤松氏ヲ通ジテ本寺ガ將軍家竝ニ要路ノ人々ト如何ニ重要ナル交渉ヲ持チシカヲ知ノ必須史料タリ。他ノ五冊ハ前者ニ比スベクモアラネド夫々好個ノ地方史料タリ。

註1 渡部多仲氏「播磨に於ける赤松氏の片影」〔國史ミ國文〕昭和三年十一月號

(五)

降ツテ徳川期ニ至ツテハ、家光以下殆ンド歷代ノ將軍家ヨリ寄セラレタル社領安堵ノ御朱印ヲ有ス。

左ノ如シ

播磨國印南郡山角村

報恩寺權現神額同村之内

拾三石餘事任先規寄附之訖

全可收納竝社中寺邊山林

竹木諸役等免除如有來永

不可相違者也

慶安元年八月十七日

家光

以下其目錄ノミヲ掲グ。

- 一、慶安元年八月十七日 徳川家光
- 一、貞享二年六月十一日 徳川綱吉
- 一、享保三年七月十一日 徳川吉宗
- 一、延享四年八月十一日 徳川重重
- 一、寶曆十二年八月十一日 徳川治重
- 一、天明八年九月十一日 徳川齊治
- 一、天保十年九月十一日 徳川家慶
- 一、安政二年九月十一日 徳川家定
- 一、萬延二年九月十一日 徳川家茂

何レモ報恩寺權現社領トアリテ、即チ寺ノ鎮守神タル若一權現社ニ寄セラレタルモノトス。

(六)

現在ノ本尊ハ十一面觀世音木像坐像ニシテ其作徳川初期ヲ溯ラザルベシ。脇立四天王ノ木彫立像稍古色ヲ佩ブ。足利中期ヲ下ラザルベキカ。本堂内向ツテ左(西側)ニ若一權現ヲ奉祀ス。僧形ノ木彫坐像ナリ。

什寶ニ足利期ト認メラルベキ紺紙金泥ノ般若波羅密多經第九十七卷一卷、同シ頃ノ紺紙銀泥ノ法華經一卷、明和五年十一月僧正光國ノ光明真言講式一卷、徳川期ヲ溯ラザルベキ頃ノ報恩寺縁起一卷、同印南山法恩寺記録一卷等ヲ藏セリ。

明治四年迄ハ寶珠院、洞禪院、金剛院、地藏院ノ塔中アリシガ地藏院ノ建物ヲ除ク外凡テ廢セリ。昭和三年ニ入リテ本堂ノ大修繕ト共ニ庫裡一棟ノ新築成リ、頓ニ往時ノ盛運ニ復セントスルノ氣運ニ向ヒツ、アルハ喜ブベシ。

(七)

吾人ハ本寺創立ノ當時ヲ追想シテ其一部ノ眞因ガ、加古川平野一帯ノ沃田ヨリ生ズル良穀ヲ寺領トナサントスル經濟觀念ノ伴ヘルモノナルコトニ言及セントスルモ、其明徴ニ乏シキヲ遺憾トス。唯赤松氏ガ播磨一帯ニ勢力ヲ得ルニ及ビ、本寺ト、當時ノ大勢力タリシ足利氏トヲ連結セントシタル策ガ、牽ヒテ赤松氏ソレ自體ニ如何ナル結果ヲ來スベキカニ努力セル此ノ地方豪族ノ心理ヲ味ハントスルコトニ、限リナキ興趣ヲ覺エテ茲ニ本稿ヲ終ラントス。(吉井委員)

赤穂郡

第三 赤松氏ノ遺蹟

法雲寺・寶林寺ヲ中心トシテ

〔圖版第一八―第二〇〕



圖二第 赤松村附近地圖

播磨千種川ノ急流ニ臨ミ、風光明媚ナル溪谷ニ沿フテ、赤松氏隆盛時代ニ於ケル各種ノ史蹟多シ。白旗山城、苔繩山城ノ如キ城塞トシテ中世ノ戰史ニ樞要ナル位置ヲ占メシモノヲハジメトシテ、赤松村ニハ赤松氏ニ縁故深キ法雲寺、寶林寺、松雲寺等ノ古刹ノ現存セルアリテ、茫々五百年ノ往時ヲ追懷セシムルモノ尠カラズ。

本委員ハ曩ニ昭和三年夏赤松村ニ赤松氏ノ遺跡ノ一部ヲ踏査シタルヲ以テコ、ニソノ二三ヲ記述シ、且ツ赤松氏發祥ノ地トシテノ赤松村附近史の考察ヲ試ミテ報告ニ代ヘントス。

二

法雲昌國禪寺ハ赤松村字苔繩ニアリ、山號ヲ金華山ト云ヒ、禪宗ニ屬シ京都相國寺末タリ。

本寺ノ開創ハ延元二年七月一日（北朝建武四年）ノコトニシテ、赤松則村ノ建立ニカ、リ、特ニ禪僧友梅ヲ迎ヘテ最初ノ住持トセリ。即チ延元元年八月ニハ足利尊氏光明院ヲ擁立シ奉リ、同十二月ニハ後醍醐天皇吉野ニ潛幸遊バサルニ至リ、次イデ此年三月越前金崎城ハ陥リ、尊良親王ハイタマシクモ自盡シ給ヒ、コレヨリ尊氏ノ勢力漸ク強クナリシガ、此時ニ際シ、尊氏ノ宿老赤松則村ハソノ發祥地ニシテ、根據地タル赤松村ニ本寺ヲ創立スルニ至リシナルベシ。コノコトニ關シテハ「雪村和尚行道記」ニ

丁丑之歲（延元二年）干戈平定、播州牧圓心、夙願鼎建新寺於赤穗郡苔繩之郷、而欲選天下有道名宿、爲開山住持、藤範秀以師酬其所問也、（中略）

乃厚加聘禮迎之、秋七月朔、拜請開山、冬十月望、創建大佛殿、寺名法雲昌國、山號金華、皆宸染也、

トアリ、而シテ彼ガ創建ノ緣由ニ關シテハ同行道記ニ委曲ヲ盡シテ載録スル所ナリ。

即チ傳フル所ニヨレバ、初メ元弘三年足利高氏ガ後醍醐天皇ニ歸順シテ丹波篠村ニ舉兵スルヤ、去年冬既ニ天皇ノ御味方トシテ播磨ニ兵ヲ舉ゲシ則村ハ、直チニ高氏ニ呼應シテ兩六波羅ノ幕軍ヲ攻ム。然ルニ一日則村ハ戰フコト七度、部下多ク敗走シテ唯七騎ヲ殘スノミトナリ、而モ敵軍雲霞ノ如クニシテ、到底戰勝ノ望ナク、遂ニ子則祐ト共ニ自刎セントスルニ至レリ。時ニ則村ハ男山八幡宮ニ向ヒ合掌誓願シ、モシ此戰幸ニ勝ツコトヲ得バ、ワレ一寺ヲ建立シテ百僧ヲ安置シ神助ニ報イント。此時八幡神ハ託宣シテ曰ク、敵北條軍ノ旗印ハ鱗形水ナリ、マタ我紋ハ左巴水ナリ、水ト水ト戰フヲ以テ勝敗ヲ決スル能ハザルナリ、紋ニ大龍ヲ加ヘ描ケバ必勝ヲ期スヲ得ベシトテ必勝ノ法ヲ授ケラル。則村コレヲ聞キ急ニ巴紋ノ上ニ大龍ヲ繪シ出デテ戰ヒ、遂ニ大勝ヲ得ルニ至リシナリト。或ハマタソノ後天下龍興リ虎疲レ、遂ニ建武年間尊氏ノ入洛トマデナリシハ皆圓心父子ノ力ニヨル、然ルニ大龍ハ寺塔ニ描クモノナレバ、八幡神ヘノ誓願ニ從ヒテ佛寺ヲ建立スルニ至リシナリト。カクテ圓心ハ小串範秀ニコノコトヲ問ヒ、範秀ノ推薦ニヨツテ禪僧雪村友梅ヲ以テソノ住持ニ迎フルニ至リシナリ。コレヨリ則村父子ハ雪村ヲ尊ビテ世尊ト稱セシト云フ。（雪村和尚行道記）

雪村名ハ友梅、自ラ幻空トモ稱シ、一山國師ニ侍スルコト數年、後京ニ入り建仁寺ニ錫ヲ留ム。又元ニ赴キシガ元徳元年歸朝シ、學徳高キヲ以テ一世ニ聞エ、元弘二年ニハ小串範秀、雪村ノ道風ヲ慕ヒ京ノ西禪寺ニ住セシメシガ、今ヤ範秀ノ推舉ニヨリテ法雲寺ノ開山始祖トナリシナリ。尙「雪村和尚語錄」ニハ播州法雲寺佛殿上梁銘ヲ錄セリ、左ニ記シ置クベシ。

聖躬萬歲、天地泰而社稷安、臣佐千秋、干戈定而、戎夷服、誓興檀度、集家門者、建武丁丑孟冬初吉日、清信沙彌月潭圓心鼎建、十身調御、統塵區以爲道場、大力量人、挿莖草以標梵

刹、願經劫石、永壯福田矣、金華山法雲禪寺開山住持、比丘雪村友梅謹題、
本寺建立ニ際シテハ友梅自ラ土木ノ役ヲ董スコト二年、稍々ソノ規模ナルニ及ンデコノ地ヲ去
リシ如ク、(雪村和尚語錄)峯相記ニ「供養ノ時萬人群ヲナスト云フ」トアレバ、ソノ規模ノ壯大ナ
リシコトヲ想像セラルベシ。

カクテ創建ノコトヲハジメテヨリ後二年即チ延元四年(曆應二年)十一月十四日ニ至リテ光明天
皇本寺ニ勅額ヲ賜ヒ、本寺ヲ以テ天下諸山ノ一ニ列セラル。雪村和尚語錄ニハ「曆應二年歲在
己卯冬至日迎接宸翰寺額綸旨及諸山帖」云々ト記シ「雪村和尚行道記」ニハ法雲寺大佛殿創建
ノコトヲ記シ、且ツ

勅造本尊、毘盧三尊、圓覺會上說相、(中略)曆應二年冬至日、宸翰勅額、諸山帖子迎接有堂上語、又
開山自筆定案、及檀那請開山狀、寺供養記錄、佛工七條法眼康俊、應永廿三年丙申、列天下十刹
ト記シ、山門ノ盛ナルコト「可謂般若叢林中國第一名藍」トサヘ述べ、支那ノ巨刹龍翔寺及
比京師天龍寺ト抗衡スベシトナセリ。嘗テ禪僧良中ハ本寺ニ留リテ左ノ詩ヲ賦ス。

祇林處々正肅條、華阜春光輝碧霄、樹遶紺園花雨合、
洞通玄圃彩雲飄、蚺喉尊者黃金錫、鶴背仙人碧玉簫、
子去瑤京望玆地、青山疊々水迢々、

又貞治四年秋ニハカノ義堂周信ガ詩ニ、

金華洞裡山書記、一十年前吾故人、別后星霜猶在眼、

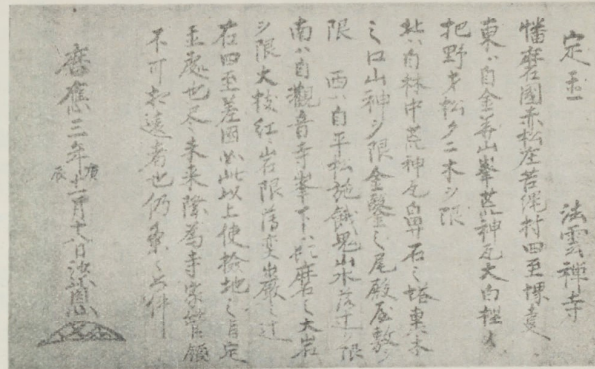
憶曾疊寺共栖身、梅花世界詩千首、芳草池塘夢幾春、

賴有諸郎遙勸駕、東遊趁々及嘗新、

トアリ。翌曆應三年ニハ雪村本寺ノ左側ニ大龍庵ヲ營ミソノ山明水秀ノ風光ヲ愛デタリトイフ。
尙去年幕府ハ本寺ヲ以テ祈願寺トナシ同郡高田竹馬庄ヲ寄進セルコト雪村和尚語錄ニ見ユル
トコナリ。

今本寺所藏ニカ、ル江戸時代寶永五年八月ノ勸進帳竝ニ赤松追遠誌序(服部義行ガ舊録ヲ訪ネテ記
セルモノ)等ニヨリ見ルニ、江戸時代ニ於ケルソノ沿革ノ大略ヲ知ルヲ得ベシ。

即チ嘉吉元年赤松滿祐ノ事變ニ際シ灰燼ニ歸シ、ソノ後荒廢ノマ、星霜ヲ經シガ、百年ノ後
江戸時代ノ中頃寶永年間ニ至リ京都相國寺雲頂院ノ天啓和尚ナルモノ赤松村ニ遊ビ、法雲寺ノ
額廢ヲ見テ嘆キ、赤松氏ノ後裔久留米ノ有馬侯ニ再興ヲ促スニ至レリ。即チ有馬氏ハ黃金二百
兩ヲ本寺ニ寄セ、コレヲ基金トシテ淨財ヲ募リ圓心ノ廟堂、二間四面ノ釋迦堂、觀音堂等ヲ造
營シ、先づ四百年忌ノ法要ヲ正徳元年ニ營ミ、有馬玄蕃頭維則、旗本赤松範泰等ノ焼香等アリ
キ。ソノ後相國寺ヨリ心淵龍甫ナル僧來リテ寺務ヲ掌リシガ、寛政十三年ニ至リテ又四百五十
年ノ佛事ヲ營ミ、ソレヨリ以後有馬侯ヨリ十二年間佛供米ノ寄進アリシガ、心淵ガ本寺ヲ去ル
ニ及ビ、再ビ廢替シ、僅カニ天保十四年三月五百年忌ノ法要ヲ營ミシ如シ。幕末時代ノモノト
覺ユル木版繪圖(圖版參照ニ據ルニタゞ堂舎一字ト五輪塔一基ノ存セルヲ見ルノミ。コノ五輪塔
ハ恐ラク圓心ノ塔婆ナラムモ、現今ノ寺域ニ存スルモノハソノ樣式足利時代ノモノニ屬セズ。



第三圖 傳赤松圓心置文 (法雲寺藏)

今本寺所藏ニカ、ル古瓦一枚ニハ「雲」ノ字見エ恐ラク
足利期ノモノタルベシ。(圖版参照)

マタ圓心自筆置文ト稱スルモノ一軸所藏セラル。(補圖
参照)

ソノ裏書ニ、

此壹軸法雲寺殿月潭圓心書之、自筆而横山家多年秘
在也、今依有馬氏助縁當寺再興、於茲室津高島隆好
聞此盛事、傾信於土木工匠之事、殊修補此表裝收、
以當時山野不堪感嘆記願末證之、

正德五乙未年九月日

法雲寺住持 天啓叟集伏誌

トアリ、寶永ノ頃久留米ノ有馬則維ガ本寺建立ノ資ヲ
寄進シタルコト既ニ述ベシ所ニシテ、江戸時代ニ至リ
本寺ノ再興セラレタルコトモコノ裏書ニヨツテ知り得
ベキモ、表面ノ圓心自筆ト傳フル置文ハソノ書風、花

押等ヨリ推シテ恐ラク當代ノモノニアラザルベシ。

尙本寺境域ニ巨大ナル楠柏アリテ樹勢旺シナルハ注意スベシ。(本報告第三輯参照)

三

寶林寺ハ赤松村宇河之原ニアリ。方三間瓦葺ノ圓心堂ト稱スルモノアリテ、東面シ、千種川
ニ臨ミ、右方白旗山城址ヲ眺ムベシ。中央ニ赤松圓心、ソノ右ニソノ子則祐、左ニ千種姫並ニ
開山別寶和尚ノ像ヲ安置ス。(圖版参照) 中ニモ圓心座像ハ高八五センチ米餘ノモノニテ、ソノ彫
法優秀ト云フニアラザルモ、ヨクソノ風貌ヲ表現シ圓心ニ親昵スルノ感アラシム。ソノ製作年
代モ室町時代中期ヲ降ラザルモノナルベシ。尙近世ニ至リ新タニ作ラレタルモノ、如キモ、「法
雲寺殿正四位上則村月潭圓心大居士靈、觀應元庚正月十三日」、「寶林寺殿正四位上則祐自天明
善律師靈、應安四年辛亥十一月廿九日」及ビ「芳松院殿從四位下日照賴範大居士靈、元暦元年
正月十四日卒、年五十」ト記セル位牌ヲ祀ル。

本寺ハ蓋シ圓心ノ子則祐ノ創建ニカ、ル禪刹ナリシナルベシ。「播磨鑑」ニハ京大佛五百佛山
智積院根來末寺ト記シ、本尊釋迦如來像並ニ則祐ノ守佛トセル聖觀音像ヲ安置セルコトヲ載セ
タレバ江戸時代ヨリ眞言宗ニ屬シタルナラム。モトヨリ足利氏ノ時代ニハ赤松氏ノ盛運ト共ニ
寺運マタ舉リシナラムモ、同氏ノ衰微ニツレ次第二類廢セルナルベシ。サレバ播磨鑑ニモ、
かゝる美麗の影堂たりと云へども、時かはり、星移りていつしかあれ果、瓦おち軒かたぶき
わづかに残る一堂宇の中に一體の像有、圓心入道の像共云、或則祐律師の影共云、いづれか
はいづれか非、木像自ら知るべし。

ト記セリ。尙千種姫覺安尼ハ則祐ノ女ト稱セラレ、容貌ノ美ナルヲ以テ聞エ、深ク佛法ニ歸依

シテ、諸國ノ靈場ヲ順禮シ、遂ニ甲斐鹽野山拔隊和尚ニ隨テ剃髮セシガ、ソノ容姿ノ美ナルヲ惡ンデ自ラ面貌ニ燒金セリト傳ヘラル。今本堂安置ノ像ニ燒鍔ノ跡アリト云ハル、ハコノ傳説ニヨレルナリ。

尙今本寺所藏ノ古瓦六枚アリ。圖版トシテ掲ゲタルハソノ一二ニシテ、恐ラク室町時代ノ作ニカ、ルモノナルベク、往時ヲ追懷スルノ好資料ト云フベシ。(圖版參照)

四

思フニ瀬戸内海斜面播磨平野ニハ、加古川ヲハジメ市川、揖保川、千種川ノ四大川北ヨリ南ニ流レ播磨灘ニ注グ。ソノ灌溉スル地方ハ品質ノ優良ト、産額ノ多量トヲ以テ聞エタル播州米ノ產地ニシテ、豐沃ナル平野ヲ展開セリ。サレバコノ經濟的價值高キ沿海平野ニハ、古代ニ早ク文化發達シ、既ニ播磨風土記ニ記載アルノミナラズ、加古川ノ下流ニハ早クヨリ古刹鶴林寺ガ開創セラレ、揖保川ノ下流斑鳩ノ平原ニハ斑鳩寺ガ建立セラレ、コノ兩寺ノ境域ニ當ル地方ハ何レモ奈良朝時代ニ大和法隆寺ノ所領タリシコト既ニ本報告第四輯ニ説述セル如シ。而シテ千種川ノ下流赤穂郡坂越村ニハ大避明神古クヨリ鎮座シ、秦人ノ子孫秦川勝ヲ氏神トシテ祀ル。赤穂地方ニハコノ大避明神ト祭神ヲ同ジクセル神社尠カラザルハ、恐ラクワガ古代ニ於ケル歸化人タル秦氏ガコノ地方ニ移住シタルニヨルナルベシ。文獻ノ上ヨリ見ルニ、現存播磨風土記ニハ赤穂郡ノ條ヲ脱スルモ、三代實錄貞觀六年八月ノ條ニハ「播磨國赤穂郡大領外正七位下秦造内營」ノ名ガ見エ、又朝野群載ニ載録セラレタル長和四年十一月ノ國符ニハ有年庄司寄人四

十一人ノ内秦姓ノモノ十二人ヲ數フベシ。有年庄ハ千種川ニ沿ヘル赤穂郡ノ古郷ニシテ、今省線山陽線ニ有年驛アリ。

カク播磨平野ノ南部ハ比較的早キ時代ニ開發セラレタル所ニシテ、ソノ最西部タル千種川ノ溪谷ニ起リシ、赤松氏ノ一族ヲシテ巨然タル大豪族タラシメタルコトモマタコノ地勢竝ビニソノ歴史ノ然ラシムルトコロナリ。

千種川ハ源ヲ北方播磨美作ノ國境附近ノ山地ニ發シテ、幾多ノ支流ヲ吞ミ、今ノ赤穂郡上郡町附近ニテ漸ク大トナリ、蜿蜒十數里、播磨ノ西端ヲ南北ニ縦貫セリ。ワガ南北朝時代ニ至ツテ豪族赤松氏ノ崛起セルハ實ニコノ川ノ溪谷ニシテ、河口ヨリ十里餘溯レル今ノ赤松村附近二里餘ノ間ナルベシ。

抑モ舊西國街道ハ現在ノ街道ヨリハ稍北ニ偏シ、今ノ揖保郡龍野町ヲ真西ニ進ミテ赤穂郡ニ入り、高田村、上郡町ノ南ヲ通過シテ少シク北方ニ向ヒ、播磨備前ノ國境船坂山ニ到ル山路ヲ云フ。マタ山陰街道ハ加古川町附近舊國府ノ所在地カラ西北ニ進ミ飾磨郡ヲ經テ、揖保郡千本村ニ入り、佐用郡三日月村ヲ經テ杉坂峠ヲ登リ美作ニ越ユルモノナリ。元弘元年後醍醐天皇隠岐遷幸ノ御時、通ラセ給ヒシハ實ニコノ通路ナリシナリ。而シテコノ舊山陽街道ト山陰街道トニ狭マレタル中央部ニテ、街道筋ノ何レヨリモ遠ク離レ千種川ニ沿ヘル小溪谷コソ赤松氏ノ發祥地タリシナレ。

今赤松村ヲ流ル、千種川ノ左岸ニハ稍離レテ白旗山巨然トシテ聳エ、標高四四〇米ヲ示シ、

北ハ楠木山、高倉山ニ連リ東ハ險岨ナル峠ヲナセリ。ソノ西ハ河ヲ距テ、苔繩山ガ標高四一一米ヲ示シテ白旗山ト相對峙シ、山系南北ニ走ル。南ハ白旗山ノ山系ニヨリテ今ノ上郡町（赤松村ノ南二里餘）ヲ包ム。

赤松村ハカ、ル地形ニ圍マレタル千種川ニ沿ヘル狹少ナル河谷ノ小平野ニ位置シ、タバ一路河ニ沿フテ道ヲ南北ニ通ズルノミ。

赤松氏ガコ、ニ據リシハ何レノ年代ニ屬スルカ尙疑問トスル所ナリ。赤松系圖等ニヨレバ赤松氏ノ祖師季ガ事ニヨリテ播磨佐用庄ニ配流セラレタルヲ以テ起源トナシ、ソノ後四世ノ孫則景ニ至リ賴朝ノ命ニヨリ建久年間佐用庄地頭職ニ補セラレタリト傳フ。然レドモ赤松氏ガ強大トナリシハ則景四世ノ孫ト傳ヘラル、赤松則村（入道圓心）ノ時代ニテ赤松氏ハ則村ニ至ツテハジメテ興起シタルモノト云ハザルベカラズ。尊卑分脈ニハ則村ハジメテ播磨國守護職ヲ拜セルコトヲ記セルモ、ソノ以前ノ赤松氏ハ恐ラクコノ溪谷ニヨレル一氏族ニテ、平安朝末ニハ此附近溪谷ニ沿ヒテ、山城石清水八幡宮神領アリ（石清水文書元暦二年正月源賴朝下文）、マタ後深草天皇建長二年ニ作成セラレタル關白九條道家處分狀ニハ播磨國佐用庄内赤松村、千草村等ノ名見ユルヲ以テ、此地方ニハ社寺權門ノ所領庄園アリシコト想像セラル。赤松氏ノ祖ハソレ等庄園ノ開發地主ナリシナルベク、ヤガテ後ニハ幕府ノ御家人トナリ地頭トナリシナラムカ。而シテ赤松氏ノ占據セル地方ハ將來ノ發展ニ恰好ノトコロナリシナリ。モトヨリソノ土地ガ谷迫ニテ狹隘ナルコトハ未ダ微々タル赤松氏ニ採リテ何等ノ不便ヲ與ヘザルノミナラズ、却ツテ集團

ノ小ナル小赤松氏ノ統一ト鞏固ナル基礎ヲ作ルニ好都合ナリシナラム。殊ニカ、ル地味肥沃ナル洪積層ノ谷地ハ小規模ナガラモ拓殖ニ適シ、土地ノ狹少ナルニ拘ハラズ比較的多クノ人口ヲ抱擁シ得タルナラム。且ツ殆ンド四面山ニ圍マレタルヲ以テ、他郷トノ交通路ハ杜絶セラレタルガ如キモ、交通經濟ノ未ダ充分發達セザル時代ニ於イテハ、サシタル痛障ヲ感ゼザルノミナラズ、谷間ヲ傳フテ遡レバ、峠越テ經テ他ノ地域ニ赴クコト不可能ニアラザレバ、氏族ノ發展ト共ニ強固ナル根據地ト聯絡ヲ取リツ、所領ノ擴張ヲ行フニ寧ロ好都合ト云ハザルベカラズ。

悉ク事實トシテ信ズルコト能ハザルモ、赤松系譜、上月系譜等ニ據レバ、則村以前ニ於ケル一族ノ苗字ニ、宇野、得平、間島、上月、櫛田、豐島、船曳、柏原等ノ名稱ヲ見ル。コレラノ苗字名ハ殆ンド千種川溪谷ニ發達シタル村落ノ地名ト等シク、後世ニ至リテ名附ケラレタルモノトスルモ、コノ赤松一族ガコノ谷迫ノ峠ヲ越エテ諸方ニ拓殖移住シ、ソノ勢力圈ヲ擴大シタルモノナルコトヲ證スルニ足ルベシ。尊卑分脈ニ則村ノ三男則祐ニ「中津川」ト註シ、山城離宮八幡宮所藏赤松圓心書狀ニハ「中津川方百姓」云々トアリ。中津川ハ千種川ノ上流ヲ云ヒ、今ノ佐用郡德久村附近ヲ流ル、ヲ上津川ト稱シ、ソノ附近ヲ舊ク上津郷ト云ヒ、ソノ下ヲ中津川、下津川ナドト云ヘリ。則祐ヲ「中津川殿」ナド呼ベルコトヨリ見レバ、則祐ガ中津川地方ニ居テ構エシコトヲ知ルベク、赤松氏ガイカニコノ溪谷ヲ利用シテ拓殖シ、勢力ヲ擴張シツ、進ミシカヲ窺知セシムルモノナリ。

コノ赤松村ノ地ガソノ交通上頗ル不便ナルコトハ、反面ニ外敵ノ防備ノ上ニ最モ堅牢ナリシ

コトヲ示スモノナリ。即チ交通ノ不便ハ防備ノ便利ヲ意味スルモノニテ、中世ノ如キ、土地略奪侵入ガ盛シニ行ハレシ時代ニ於イテハ極メテ安固ニ、而モ他ノ侵略ヲ顧慮スルコトナク、一意土地開發ニ力ヲ注ガンニハ、カ、ル地ヲ選バザルベカラズ。殊ニ強大ナル豪族ガ附近ニ蟠居セル場合ノ如キハ防禦ニ天然ノ地形ヲ選バザレバ、ソノ一族ハ他族ノ蠶食ヲ受ケルノミニテ到底ソノ地域ヲ全フスルコト能ハザルナリ。千種川ノ溪谷赤松村ハコレニ最モ適當セル所ニシテ、而モ赤松氏ガ東ト西ニ白旗山ト苔繩山トノ二峰ヲ障壁トセルハ兩山ノ麓ニ展開セル小平野ヲシテ極メテ安全ナル地帯タラシメシナリ。カノ延元三年新田義貞ノ白旗城攻略ガ失敗ニ終リ、足利尊氏、直義等ノ上洛ヲ容易ナラシメシコトハ、史上顯著ナル事實ニシテ白旗城ノ強固ナルコトヲ示シタルモノトイフベシ。(魚澄委員)

津名郡

第四 岩屋ノ砲臺

〔圖版第二一—第二八〕

一、序 說

弘化三年閏五月北米合衆國ノ使節「ビツテレー」軍艦二艘ヲ率キテ相州浦賀ニ渡來シ、奉行大久保忠豐ニ由ツテ書翰ヲ幕府ニ上リ、修好通商ヲ我國ニ請フコトアリ、事天聽ニ達スルヤ、同年八月廿九日畏クモ關白應司政通ヲシテ聖旨ヲ幕府ニ傳達セシメラル。ソノ文ニ曰ク、近年異國船時々相見ヘ候趣、風説内々被聞召候、雖然、文道能修、武事全整候御時節、殊海邊防禦堅固之旨、是又兼々被聞召候間、御安慮候得共、其風聞彼是被爲掛叡念候、猶此上、武門之面々、洋蠻之事、不侮小寇、不畏大敵、宜籌策有之、神州之瑕瑾無之様、精々御指揮候而、彌可被安宸襟候、此段宜有御沙汰候事。

八月

之ヨリ後モ、英露ノ船艦近海ノ各地ニ出沒スト聞召シテハ、重ネテ勅諭ヲ當局ニ降シ給フテ海防ノコトヲ嚴飭アラセラレタリ。嘉永六年六月彼ノ米國水師提督「ペルリ」ノ來航ニ際シテハ、畏クモ畿内ノ七社七大寺ニ一七日ノ祈請ヲ籠メラレ、偏ヘニ神明佛陀ノ冥瞻ヲ仰ギテ、夷

類ヲ退攘シ國體ニ拘ルコト莫ク、四海靜謐天下泰平、寶祚長久萬民娛樂ヲ禱リ給フ。幕府素ヨリ國家ノ大事ニ任ズト雖モ、大勢ノ赴クトコロ遂ニ抗スベカラズ、安政元年（即チ嘉永七年十一月改元）三月米國ト神奈川ニ修好和親條約ヲ締結セシガ、コノ時江戸ニ於イテ、列侯ニ示セル幕府ノ諭告ニ曰ク、

此度渡來之亞墨利加船、内海退帆いたし候、然る處、右滯船中、彼是自儘之所業等有之候よし、意外之兵端を相開候儀も難計候に付、夫々御固被仰出候得共、船軍之御備向未御整不相成折柄、無餘儀平穩之御仕置被成置、彼方志願之内、漂民撫恤並航海來往之砌薪水食料石炭等船中闕乏之品々被下度儀、御開届に相成候、云々

ト。事情斯クノ如シ、故ニ、更ニ曰ク

當今不容易御時節に付、兼而被仰出も有之通、質素節儉を相守、此上、水陸軍事一際相勵、若非常之儀も有之候は、速に本邦之御武威相立候様、可被心掛候、云々。

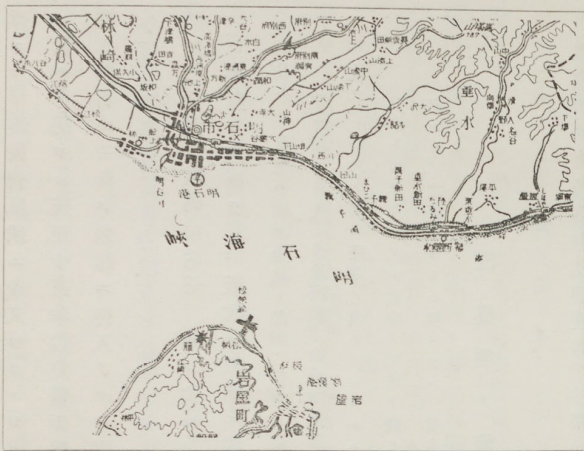
コノ年七月改メテ勅諭ヲ幕府ニ賜ヒ、「神國之瑕瑾無之様、御指揮勿論之御事と思召」サル、旨ヲ仰渡サレタリ。

幕府ハ、諸大名ニ對シテ水陸ノ防備ヲ諭達セルノミナラズ、事實ソノ實行ニ當レリ。カクテソノ結果ハ、或ヒハ大砲ノ鑄造トナリ、或ヒハ大船製造ノ解禁トナリ、更ニハ砲臺ノ築造トナリテ具體化セラレタリ。ワガ岩屋砲臺ノ造營ノ如キモ、當ニ斯クノ如クシテ成レルモノナリトス。

二、岩屋ノ地位

岩屋ハ淡路島ノ最北端ニ位置シ、明石海峡ヲ挾サンデ播磨ノ地ニ對ス。同海峡ハ岩屋町ノ北

第四圖 岩屋町附近地圖



場臺ノ帆松×

部即チ松帆崎（註ニ於イテ最モ狹ク、ソノ最短距離ハ三十四五町ニ過ギザルナリ。對岸ハ云フ迄モナク明石灘子ノ地ニシテ、之ヲ東スレバ神戸即チ往時ノ兵庫ニ達シ、更ニ進メバ大阪ニ至ルベク、京師ハ目睫ノ間ニアリ。岩屋ハ實ニ、由良ト共ニ瀬戸内海ノ咽喉ヲナスモノニシテ、兼ネテ京師ノ外唇タリ。サレバ、古來交通ノ要衝トシテ交通上マタ軍事上頗ル注目セラレタルコトハ、コ、ニ縷説ノ要ヲ見ズ。王朝ノソノカミ淡路國石屋ト播磨國明石濱間始メテ船竝ニ渡子ヲ置キテ以ツテ往還ニ備ヘタルコト（續日本後二年八月條）サテハ、春ノ舟人「しるしの煙」見セワビテ霞ヲイトヒシ（新勅撰集卷十九）中世ノ有様ハ姑ク措クモ、近キ頃ニ於イテ、天正元年將軍足利義昭、信長ト際アリテ備後ノ方ニ下リシ時、毛利氏之ヲ援ケテ上國セル

折ニモ、淡路岩屋城ニ攻入ツテコレヲ拔キ、進ンデ大阪ニ兵糧ナドヲ籠メタルコトハ後太平記ニ見エ、同ジク天正十三年六月豊臣秀吉ノ四國長曾我部氏征伐ノ時ニモ、ソノ部將羽柴秀次ガ播州明石ヨリ此ノ岩屋ニ押入リタル事ハ「四國御發向並北國御動座事」ニ見ユルガ如ク然リ。後年領主蜂須賀侯ガ岩屋及ビ松帆ノ地ニ築港ヲ試ミタルガ如キモ、亦以ツテ此ノ地ノ重要ナルヲ語ル一例證トスベシ(註二)。モシ夫コノ地ノ、最近マデ要塞地帶トシテ由良要塞ニ管理セラレタルノ事實ニ至ツテハ、近代ノ戰術ニ照シテ尙且ソノ重要サヲ失ハザリシ一證左トナスベキナリ。

註一 松帆ハモト松尾ト書ス。舊記ニモスベテ松尾浦、松尾臺場等ト見ユレド、今ハ現在ノ慣用ニ從ヒ、コノ文字ヲ用ヒタリ。土地臺帳、陸地測量部地圖等皆此ノ慣行ニ同シ。

註二 松帆ノ地ニ築港ノ試ミラレタルハ安政六年十月ヨリノコトナリ。イマ蜂須賀侯爵家ニ「岩屋浦松尾堀港書類」ト題セラレタル當時ノ記錄ヲ藏セリ。而シテ、ソノ遺跡ハ松帆臺場ノ後背ニ在リテ、能クソノ規模ヲ今ニ存セリ。之等ノコトニ就イテハ、他日研究ノ上發表スルノ機アルベキヲ思フ。

三、臺場ノ築造

松平 阿波守

其方領分淡路島由良湊最寄、并岩屋邊は大阪湊之要所に付、右要害之場所ハ臺場新築被申付、防禦之義、厚手當可被致候、紀伊殿領分紀州加田浦邊、并松平兵部大輔領分播州明石邊も同様之場所に付、臺場取立防禦筋之義、厚世話有之候様、被仰出候、此段爲心得相達候事
右ハ、安政元年十二月廿八日幕府ヨリ德島藩主蜂須賀侯へ諭達セラレタル示令ニシテ、岩屋ノ

砲臺ハ當ニコノ示令ニヨツテ經始セラレタルモノナリ。

本示達ノ發セラレタル事情即チ主動者ノ何人ナルカニ就イテハ、未ダ審查ヲ經ズト雖モ、コノ年十一月幕府ハ勘定奉行石河土佐守大久保右近將監等ヲ遣ハシテ、紀州及ビ播淡二州地方ノ臺場新築ノタメ該地ヲ巡見セシメタル事實モアレバ、幕府ニ於イテ相當主動的態度ニアリシコトハ、素ヨリ之ヲ認メ得ベキナレドモ、一方領主德島藩ニアリテモ亦、可ナリノ熱意ヲコ、ニ致シタルコトハ明カナリ。蜂須賀家記ニヨレバ、安政五年二月大龍院公ハ幕府ノ軟弱ナル外交態度ヲ嫌ラズトナシ、密カニ書ヲ前關白鷹司政通ニ上リテ己ガ意中ヲ陳べ、若シ外國ノコトヨリ延イテ京師ニ緩急ノコトアラバ、臣ハ將ニ列藩ニ先ンジ、兵ヲ率キテ闕ヲ守リ、粉骨碎身シテ以ツテ微忠ヲ致サムコトヲ述ベタリ。コノコト、後文久二年五月及ビ六月ノ兩度、幕府ニ上申セル同藩主ノ意見書(開國起原參照)ニ稍杆格スルノ嫌ヒ無シトセザルモ、少クトモ、當年即チ安政五年アメリカトノ條約締結ニ際シテ、腹臆ナキ存意ヲ列侯ニ徵セラレタル時ノ同藩主ノ陳辯即チ何時戰爭モ難計候間御軍制御改革有之度事ト一條ト、意氣相通ズルモノアリ。況ンヤ前記文久二年兩度ノ海防意見書ニ見ルガ如キ、具體的ニシテ且ツ眞實ナル同藩ノ態度ニ徵スレバ、コノ岩屋砲臺ノ取立ノ如キモ、單ニ幕府ノ命ニヨリテノミ、受動的ニ成シタルモノト解スベカラザルモノアルヲ思フ。

尙之ニ付ケテ思ヒ合ハサル、コトハ、嘉永六年六月カノ米國船艦渡來ノ節、德島藩ハ彦根ソノ他ノ諸藩ト共ニ、コレガ警備ヲ仰付ケラレタルノ事實ナリトス。乃チ、之ニヨツテ同藩主ハ

安政元年三月將軍家ヨリ警衛慰勞ノ有難キ言葉ヲ蒙リ（幕末外國關、係文書之五）、更ニ同年四月ニハ、羽田大森

（同文書）

ノ警衛ヲ同藩主齊裕ヘ仰付ケラレタルコトモアリタリ。斯クノ如キハ、海防ニ關シテ何等カノ刺戟ヲ同藩ニ與ヘタルベキコトハ推想シ得ベキコトナリトス。假令ソレガ新シク海防意識ヲ附與スルノ原因トナリタルカ、將タ單ニ素懷ノ海防意識ヲ強調スルノ影響タルニ止マリタルカハ、尙考究スルノ餘地アリトスルモ——。試ミニ記シテ後ノ考證ヲ俟ツ。

斯クノ如クニシテ、此ノ砲臺ハ成レリ。蜂須賀家記ニ曰ク、

安政元年申寅十一月、幕府以由良岩屋、爲攝海咽喉之地、命築砲臺以備外寇、於是、築壘壁于由良港、南北五町高二尋餘、架大砲六十四門、岩屋則就松尾龍松岬拂川古城四所築之、架大砲十三門、七年而成。

四、岩屋砲臺ノ完成

文久三年ノ四月以來將軍家茂、攝海ニ巡遊シテ各地ノ臺場ヲ觀察セシガ、五月十八日コレガ防備ノ狀ヲ具シテ朝廷ニ奏上セルトコロニヨレバ、紀淡海峽ナル由良ノ方ハ最早落成ノ模様ニ見エ、明石海峽ナル松尾崎ノ方ハ未ダ落成ニハ至ラズ專ラ取掛居ル旨ヲ述ベタリ。而シテ、明石ノ分ハ、「小家ノ儀手及兼候義モ可有之ニ付、入費ノ手當差遣、早々増築爲致候」トアレバ、之モ未ダ完成トマデニハ至ラザリシモノト思ハル。尙、此ノ上奏文ニ於イテ、淡州ノ義ハ防禦筋行届、出兵訓練モ熟シ居ルニヨツテ、阿波守家來共マデ賞美ヲ差遣ハス積リナル旨ヲ表明シ

居レリ。以ツテ阿波守即チ徳島藩ニ於ケル熱心ノ程ヲ察スベキナリ。ソハサテ措キ、イマ是等ノ臺場ノ築造程度ヲ、海舟日誌ニヨリテ推察スルニ、五月四日將軍明石舞子濱ニ上陸セル時ハ此處ニテ發砲ヲ將軍ノ御覽ニ入レ、由良ニ至レル時モ、同所ノ「銃臺」ニテ放發ヲ上覽ニ供セリ。サレバ、明石及ビ由良ノ臺場ニアリテハ、當時已ニソノ射發ヲ演ジ得ル程度ニ工事ノ歩ノ進捗セルヲ知ルベシ。而シテ、コノ時岩屋松帆ノ臺場ハ、タダ船中ヨリ將軍之ヲ觀覽セルニ止マリタリ。コレ果シテ如何ナル理由ニヨリテ然ルカハ判然セザレドモ、思フニ、カノ上奏文ニ見ユルガ如キ程度ノ工事ニ止マリ、未ダ實演ヲ見ルベキ程度ニ至ラザリシニヨルモノカ。

同ジ海舟日誌同年八月七日ノ條ヲ檢スルニ、七月廿三日幕府ノ軍艦朝陽丸ガ松尾岬邊ヲ通航ノ折柄、同所ノ砲臺ヨリ發砲セラレ、舵ノ邊ニ着彈ヲ見タル記事アリ。モト此ノ記事ハ、大阪ノ塾中ヨリノ來狀ニヨルモノニシテ海舟ノ實見ニアラザレドモ、砲發ノ事實ニ就イテハ疑フベキ理由ヲ見ズ。シカモコノ事ハ、長州船砲擊ノ一件トシテ、今ニ郷人ノ口ニ膾炙スルトコロナリ。之ニ由リテ考フレバ、文久三年七月ノ交ニ及ンデハ、此ノ砲臺モ、少クトモソノ一部ノ竣成ヲ告ゲタルコトハ疑フベカラザル事實ナリトスベシ。（註）

註 蜂須賀家記ニ、七年而成トアルハ、實カ不審ナキニアラズ。サレド、同書ニ就イテハ、予ハタマソノ抄萃ヲ見タルニ止マリ、未ダ之ヲ通讀スルノ機會ヲ得ズ、姑クコトニ疑ヲ存スルノミ。

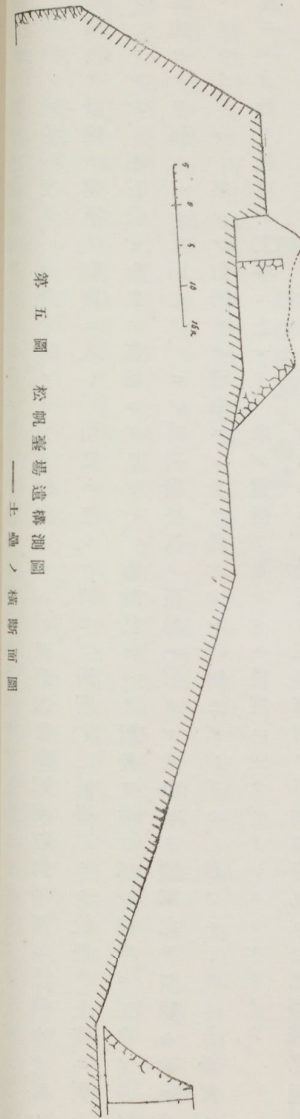
五、岩屋砲臺ノ規模

岩屋ノ砲臺ハ、前記蜂須賀家記ニ見ユルガ如ク、一個所ニノミ集結シテ築造セラレタルモノ

ニアラズシテ、明石海峡ニ面シテ略四ヶ所ニ散在シテ建設セラレタルナリ。最モ北ナルヲ松帆ノ臺場及ビ拂川ノ臺場トナシ、最モ南ナルヲ古城ノ臺場トナス。コノ間ニ、龍松^{リョウシュウ}・長谷川ノ二臺場アリ（外ニ、尙一兩所ノ小臺場モアリタリ）。各臺場ハ程ヨク配置セラレ、通ジテ南北凡ソ三十五町、スベテ今ノ岩屋町ヲ限レル地域ニアリ。イマ此等ノ各々ニ就イテ細説ヲ試ミ、以ツテ岩屋砲臺ノ規模ヲ窺フノ便ニ資セム。

1、松帆ノ臺場

松帆ノ臺場ハ岩屋砲臺ノ最北ノモノニシテ、松帆浦ニアリ、海岸ニ瀕ス。實ニ此ノ岩屋砲臺ノ本壘ヲナスモノナリトス。而シテ、コレガ規模ノ詳細ニ關シテハ、幸ヒイマ蜂須賀侯爵家ニソノ實測圖（註一）ヲ所藏シ、且ツ遺蹟モ能ク往時ノ面影ヲ傳ヘタレバ、良ク當時ノ態容ヲ觀ルヲ

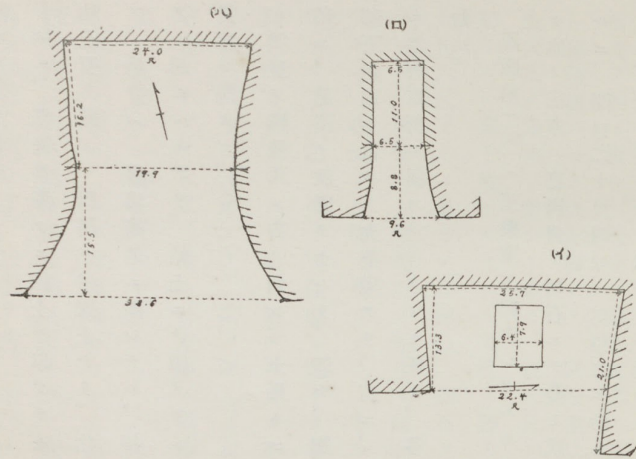


第五圖 松帆臺場遺構測圖
——土壘ハ、石壘ニ面

得ベシ。

本臺場ハ稍小高キ平坦地ヲ利用シテ之ヲ設ケ、ソノ中央ハ所謂固有臺場ヲ形成ス。固有臺場ハ北面シ、前方部ハ雄大ナル土壘ヲ以ツテ築カレ、ソノ狀脚ノ開キタルM字形ヲナス（圖版第二ニ參照）。

土壘ノ前面ノ脚部ハ花崗岩ノ切石ヲ以テ疊ミ上ゲタリ、石壘ノ高サ凡ソ九尺ナリ。今コノ土壘ニ就イテ見ルニ、石壘ノ上ニアリテハ、五十度ニ餘ル急勾配ニ粘土ヲ盛り上ゲ、コノ高サ斜面ニ沿ウテ二十六尺三寸ヲ數フヲ以ツテ推セバ、土壘ノ總高サハ三丈有餘ニ達スベキナリ。最上部ニ於イテ土壘ノ幅十二尺六寸乃至十三尺八寸アリ、ソノ内方ハ高サ凡ソ四尺許リ切取リタルガ如ク急勾配ニ低下シテ、コ、ニ胸壁ヲ形成ス。之ヨリ先ハ極メテ緩慢ナル勾配ヲナシテ、二段トナリテ平坦地ニ續ク、上段ハ砲座ソノ他ノ架構ノ存スルトコロ、下



第六圖 松帆臺場遺構測圖（各平圖面）
（イ）砲座 （ロ）彈藥庫 （ハ）火藥庫

段ハ所謂武者走リナリ。

茲ニ、壘壁ヲ築クニ粘土ヲ以ツテセルハ注意スベキ點ニシテ、コノ臺場ニ接近シテハ殆ンド粘土質ヲ見ズ、四周ハ砂礫土ナリ。此ノ臺場ヲ西ニ離レテ拂川ノ邊ニ至レバ粘土ヲ得ベシト云フ。然ラバ、臺場築造ニ際シテハ、特ニ粘土ヲ他ノ地ヨリ採取シ來ツテ此ノ臺場ヲ經營セルモノト認ムベキナリ。粘土ニテ固メラレタル壘壁ノ、砂礫土ノソレニ比シテ鞏固ナルベキコトハ贅言ヲ俟タズ。(註二)

堡壘ノ構造凡ソ右ノ如シ。土壘トコレガ上部ニ設ケラレタル胸壁トニ掩護セラレテ、ソノ内
部ニ、諸種ノ設備ヲナセリ。即チ、胸壁ノ内側ニ砲架及ビ彈藥庫アリ。ソノ内方即チ土壘ノ下
部下坦地ニ當リテ火藥庫アリ。別ニ、平坦地ヲ繞リテ土分ノ詰所ト兵卒ノ休息所トヲ設ケ、更
ニ裁判詰所ト稱スルモノヲモ置キ、各々棟ヲ分チテ設置セラレタルコト、圖版第二ニ見ルガ
如シ。

圖版第二ニ玉藥室ト記サレタルモノハ火藥庫ニシテ、ソノ數二個アリ。火藥庫ハ、前面ヲ除
ク他ノ三方ハ花崗岩ノ切石ニテ壘ミ成セリ。今ソノ一即チ西南ナルモノニ就イテ、之ヲ計量ス
ルニ、間口二十尺四寸、奥幅之ニ沿ヒ、奥行十九尺五寸アリ、而シテ高サハ今六尺二寸ヲ數フ
ルモ、現ニ埋没セル部分ヲ計量スレバコノ上尙二尺以上ノ高サヲ見積ラザルベカラズ。火藥庫
ハ上ニ切妻形ノ屋根ヲ有シタリト覺シク、且ツ漆喰ニテ之ヲ作レリ。漆喰ハイマ現地ニ遺存シ

テ能ク往時ノ規模ヲ偲バスモノアリ、桁梁ノ置カレタル跡モ明カニ遺レリ。(漆喰ノ厚サ一尺四
寸、ソノ内、梁ノ部五寸ヲ數フ)。倉庫ノ前方ノ設備ハ、イマ之ヲ實地ニ證シ難キモ、由良ノ舊
砲臺ノ例ニ徴シ、又此ノ地ノ古老ノ言ニ參考シテ、觀音開キノ木造扉ナリシト推想セラル。(註三)

彈藥庫ハソノ數五個アリ、圖版第二ニ見ユル藥室ナルモノ即チ之ナリ。彈藥庫モ、ソノ構
造大凡火藥庫ノ如シト雖モ、彼ニ比シテソノ形小ナリ。即チ、入口ヨリ凡ソ八尺八寸ノ所ニ、
恐ラクハ扉ト覺シキモノ、架構ノ跡アリ、コノ部ヨリ計リテ間口六尺五寸、奥行十一尺、高サ
大凡六尺アリ、壘ムニ花崗岩ノ切石ヲ以ツテシ、且ツ石壘ノ裏側及ビ奥室ノ主要部ニ漆喰ヲ用
ヒタリ。墜落セル屋根石ノ殘片モ遺存シ、依ツテ以ツテソノ構造ヲ想察スルニ足ル。

次ニ、砲架ノ規模ニ就イテハ、幸ヒニ之ガ狀況ヲ窺フベキ設備ヲ遺存セルモノ本臺場ノ西南
部ニアリ、之ヲ彼ノ實測圖ニ就イテ案ズルニ當シク廿九拇白砲ノ趾ナリトス。土壘ノ上即チ胸
壁ノ内方ニアリテ、地ヲ劃スルコト略長方、幅二十二尺四寸又ハ二十五尺七寸、奥行十三尺三
寸又ハ二十一尺アリテ、之ヲ圍ムニ高サ約六尺ノ土壘ヲ以ツテス。而シテ、長方形ノ地劃ノ略
中央ニアタリテ又、更ニ長方形ノ稍地凹アリ、ソノ大サ縱七尺九寸、横六尺四寸、恐ラクハ砲
座ノ遺構ノ一部ナルベシ。

大砲ノ數ハ、カノ實測圖ニヨレバ總テ十三門ナリ。内、最大ナルヲ八十封度砲トナス、ソノ
數四門。次ハ六十封度砲ニシテソノ數三門、他ノ五門ハ廿四封度砲ニ屬セリ。別ニ、前記ノ廿
九拇白砲一門アリ。以上ノ内、七門ハ鐵製ニ成リ、他ノ六門ハ銅造ナリ。(註四)

以上ノ外、土壘ニ近キノ内方ニ二個ノ焙玉竈ヲ設ケタリ。コレ焙焙ニ彈藥ヲ交ヘテ填スルノ作業設備ナリ。

凡ソ以上ノ如キヲ以ツテ所謂固有砲臺ノ規模トナス。松帆臺場ハコノ固有砲臺ヲ主體トナシ之ニ續キテ左右即チ東西ニ長ク伸ビタル目隠ノ土壘アリ。ソノ狀宛トシテ蝙蝠ノ翼ヲ張レルガ如シ。但シ左翼ハ特別ノ施設ヲ爲サズ、自然ノ丘壘ヲ利用シテ以ツテ翼トナセリ、當時別ニ作リ成サレタル松帆堀湊ノ防波堤ハ亦自ラナル防壘トナレリ。右翼ノ目隠シハ、現ニ見ルトコロソノ高サ一丈許リ、基部ノ幅二丈餘ト目測セラレ、大谷川ヲ越エテ長ク東方ニ延ビタリ。コノ右翼ノ中部ニ當ル地ヲイマ俗ニ六番ト稱ス、六番トハ砲臺築造當時ノ分擔區劃ニ原由スル稱呼カト思ハルレドモ尙ソノ明證ヲ得ズ。或ヒハ彼ノ堀湊築營ノソレニ關スルモノナルヤモ知ルベカラズ。因ミニ記ス、此ノ六番ノ地點ハ該港ノ東入口ニアリ、今尙S字形ヲナシテ、往時ノ狀態ヲヨク保持シ居レリ。

尙、兵士ノ訓練場ハ主臺場ノ後方ニ置カレタリ。

註一 本圖ハ製作ノ年時ヲ明カニセズ、「岩屋浦松尾御砲臺之圖」ト題書セラル。イマ之ヲ實地ニ對照スルニ多少ノ相違アリ。例セバ、後記固有砲臺ノ右袖チナス地ニ遺存セル彈藥庫ノ、圖上ニ見エザルガ如キナリ。サレド、圖ノ全體ヲ通ジテ、能ク遺構ニ合致スルモノアレバ、之ヲ實測圖ト見做シテ斯ク呼ベリ。

註二 臺場ニ使用ノ岩石ハ、後記ノ古城ノ舊城址ヨリソノ用材ヲ撤去シ來リタルモノト云傳フ。

註三 砲臺庫ノ他ノ一ハ挿圖第六圖ニ示セルモノニシテ、ソノ構造ハ素ヨリ之ニ等シキモ、大サニ於イテ稍異ナルモノアルハ圖示ノ如シ。

註四 岩屋誌ノ卷ストコロニヨレバ、松帆臺場ニハ大砲七門ヲ中央ニ据エ、更ニソノ兩側ニ舊式野砲各二門ヲ据エタル由ナレドモ、果シテ如何ニヤ。尙、岩屋誌ハ、大正天皇ノ御即位ノ大典ヲ記念シテ大正四年十一月、

同町ニ於イテ編纂セルモノ、名所舊蹟篇ハ主トシテ石屋小學校長岡上木工太郎氏コレガ調査執筆ノ任ニ當レルモノナリ。

ロ、拂川ノ臺場

松帆ノ臺場ヲ西ニ去ルコト三四丁ノ地ニ一細流アリテ北ニ奔レリ、名ケテ拂川ト云フ、實ニ岩屋町ト野島村トノ境界ヲナスモノナリ。臺場ハコノ川口ニ當リ、明石ニ直面ス。南ノ方組板山ヨリ伸ビ來レル一脈ハコ、ニ至ツテ小丘ヲナシ、海岸ニ兀立セルガ、此ノ丘上ヲ平夷シテ三畝歩許リノ空地ヲ設ケ、此處ニ臺場ヲ經營セルナリ。前面繞ラスニ土壘ヲ以ツテス、ソノ高サ凡ソ六尺許リ、別ニ火藥庫等ノ設備アリシ容子モナク、又コノ事アリシヲ傳承スルトコロモナシ。野砲二門ヲ置キテ非常ニ備ヘタリト傳ヘラル。(圖版參照)

ハ、龍松ノ臺場

コノアタリ一帯ハ突兀タル岩石ヲ以ツテ成リ、龍松^{リウシュウ}ハソノ鼻端ニシテ、海面ニ突出セル丘壘ナリ。松帆臺場ヲ去ルコト東南凡ソ十一町許リ。臺場ハコノ丘壘ノ上海面ニ近ク設ケラレタリイマ西浦ニ至ル縣道コノ地ヲ鑿斷セルニヨツテ往時ノ態容ヲ失セルモノ歎カラザレドモ、現ニ丘上ニ少シク削夷セラレタル個所アリ、コレ砲架ノ設ケラレタル故地ナリト傳フ。前面ニ高サ

四尺程ノ土壘ヲ繞ラセテ胸壁ヲ作セリト云フモ、イマ之ヲ立證スベキ證據ナシ。丘上前記ノ平坦部ニ接シテ、傳フルガ如ク火藥庫跡ト目スベキ一ノ加工ヲ見ル。即チ地盤ノ岩面ヲ掘リ凹ムルコト方形、ソノ大サ間口十尺四寸（奥ハ稍廣シ、即チ十一尺三寸）、奥行約十九尺アリ。タマ天井及ビ入口ソノ他諸般ノ設備ヲ窺フベキ遺物ノ存スルモノナキハ遺憾トスベシ。（圖版參照）

岩屋誌ノ記ストコロニヨレバ、本臺場ニハ大砲四門ヲ東西ニ分チ据エ、西側ナル松帆ニ面セル所ニ荻野砲二門ヲ据置キタリトナリ。

尙、兵士ノ詰所即チ陣屋ト稱スルモノハ、コノ臺場ノ後方ニ當リ、狹間ヲナセル地ヲ利用シテ設置セラレタリト云フ。

二、長谷川ノ臺場

長谷川ノ臺場ハイマ衛戍病院分院ノアルトコロ即チモト八幡社ノ社地ニ在リシト云フモ、ソノ遺跡ノ現ニ見ルベキモノ無キハ頗ル遺憾トスルトコロナリ。岩屋誌ニヨレバ、コ、ニ野戰砲二門ヲ備ヘタリト云フ。

ホ、古城ノ臺場

古城ハ即チ岩屋城址ニシテ、前記龍松岬ヲ東南ニ去ルコト約十五町、長谷川ヨリ凡ソ九町ノ地點ニアリ。臺場ハソノ脚部ニ在リ、海ニ瀕シテ置カレタリ、イマ繪島館ノアルトコロナリ。地ヲ駒型ニ劃シ、頭部ヲ海面即チ北方ニ置ク、前頭部ノ一邊ハソノ長サ歩シテ五十二歩ヲ數フベク、他ノ一邊モ略々同等ノ長サヲ有ス。廣ムニ石垣ヲ以テテス、ソノ高サ現ニ六尺許リ、モト波打際マデ達セリト覺シキガ故ニ、本來ノ高サハ優ニ九尺ヲ越ユベシ。石壘ノ上ニ目隠シノ土壘ヲ繞ラスコト前記ノ諸臺場ニ見ルガ如ク然リ。傳フルトコロニヨレバ、此處ニ大砲四門ヲ左右ニ分チ据エ、ソノ間ニ更ニ小型ノモルチリ砲ヲ配シタルナリ。（圖版參照）

コノ地ニ續イテ東ノ方三町許リノ地點即チイマ石屋神社ノ境内ニ懸リ石鳥居ノ立ツ邊リニ一小臺場ヲ設ケ、コ、ニ野戰砲二門ヲ据エタリ。コノコトハ、當時親シク該臺場ノ守備ニ當リタル郷士ノ一人井戸彌太郎氏ノ告グルトコロ、信據スルニ足ルベシ。

六、岩屋砲臺ノ守備

已ニ岩屋砲臺ノ規模ヲ窺ヒタレバ、更ニ進ンデ之ガ守備ニ就イテ尋スルトコロアラムトス。文久二年秋、生麥事變ノ紛雜ニ引續キテ、英艦攝海ニ入ルトノ風說荐リニ至リ、朝廷ニアリテハ、コノ年十二月鹿兒島熊本佐賀德島等十二藩ヲ京ニ召サレテ、攝海防備ニ關スル策問ノコトアリシガ、更ニ武家傳奏ヨリ重ネテ、海防ノ實情如何ヲ言上スベク精忠ノ人體ヲ早々上京セシムベキヲ下命セシ折シモ、德島藩ヨリ言上セルトコロニヨレバ、凡ソ次ノ如ク然リ。即チ、紀淡ノ邊海ハ肝要ノ地、而シテ淡路ハ環海ニシテソノ東北二面ノ要地ハ由良岩屋ノ兩地ニ過ギタルハ無シ、由良ハ紀灘ニ相對シテ距離三里許リノ所、海門ノ姿ナレバ、カネテ堅牢ナル砲臺ヲ築造シ、砲手モ夫々相備ヘ、船手ハジメ土着ノ士モ指置キ、ソノ總押トシテハ家老稻田九郎兵衛ヘ委任シ、諸事深甚ノ配慮ヲナシ置カレタリ、而シテ「岩屋之儀ハ播州明石ニ相對シ、西國航路之要衝ニ御座候故、兼テ鐵砲頭ヲ始メ其外番兵指置、番頭分指添、守衛申付」ケアリ、

ソノ外、西浦ノ分ハ、前二者ノ如キ要地ニハアラザレドモ、所々ニ屯兵ヲサシ置キ、軍艦ハ洲本城ソノ他ノ浦々ニ艦シ置キ、應援セシムベキ準備アリ、尙、時機ニ應ジテハ阿波國表ヨリ援兵ヲ繰出シ、藩主父子ノ内ヨリモ出張致スベキ手筈已ニ成リ居レリ、云々ト。以ツテソノ大體ヲ推スベシ。

岩屋砲臺ノ守備ノ具體的ナル點ニ關シテハ尙精査ヲ要スベキモノアレドモ、イマ井戸彌太郎氏ソノ他岩屋町ニ現住シ往時ノ守備及ビ訓練ヲ受ケタル人士ニ就イテ按ズルニ、岩屋ノ守備ハモト淡路洲本ヲ根據トシ、其處ヨリ交替ニ出張ノ上ソノ守備ニアタリシガ、後ニ至ツテ徳島藩ノ中老職（五家老ノ下役）寺澤男成ナルモノ總督トシテ赴任スルニ及ンデ居据リトナリ、屋敷ヲ今ノ近藤病院ノ地ニ構ヘテ常詰トナリタリト云フ。總督ハ當時ノ稱呼ニシテ云ハハ隊長ナリ、資格ハ物頭ニシテ四百石ノ知行ナリシト云フ。他ニ組頭一人アリタリ、小須賀進ナル人名記憶ニ存セラル。又、岩屋誌ノ記ストコロニヨレバ、岩屋在住ノ藩士四十三人ト、別ニ新タニ城下ヨリ移住セシメタル藩士三十名トヲ以ツテ防備ノ中堅トナシ、之ニ近村ヨリ募集セル農兵二百六十人ヲ訓練シテ之ニ併セ、斯クシテ編成セラレタル四ケ中隊ヲ以ツテ岩屋砲臺ノ守備ニ當ラシメタリト云フ。然ラバ即チ、所謂屯田ノ態ヲナシテ此ノ砲臺及ビ此地ノ守備ニ當リタルモノト見ルベキナリ。

所謂屯田兵ノ制ハ、素ヨリ此ノ藩ニ於イテノミ認メラレタルモノニアラズ、カノ水戸烈公ノ海防愚存六ヶ條ニモ、海岸要害ノ場所ヘ屯成ヲ設ケ、漁師等ヲモ交ヘテ土兵ヲ編成シ防備ニ充ツベキコトヲ主張シ、斯クセバ、城下陣屋等ヨリ人數繰出ス迄ノ一支トモナリ、且ツ指導ソノ宜シキヲ得ナバ、アツバレノ働キヲナス者サヘ出ヅベク、所詮實用的且ツ永續的ノ良策タルベキヲ詳論シアリテ、コノ制度ハ、恐ラクハ當時ノ識者ニ齊シク認識セラレツ、アリシモノカト思ハル。

七、岩屋砲臺ノ現状

幕末ノ騷亂モ王政復古明治維新ノ進展ト共ニ漸ク收マリ、ソレト同時ニ、開國ノ國是モ確立シ對外關係モ常態ニ復スルヲ得、カクシテ、攘夷ノ聲ニ押立テラレタル各地ノ臺場ハ自然ソノ意義ヲ滅却セラレ、ノ結果トナリ、ソノ必要ノ失ハル、ト共ニ、漸次砲臺ノ撤去ヲ見ルニ至レリ。ワガ岩屋ノ砲臺モ、斯クノ如クシテ漸クソノ存在ノ價值ヲ時人ニ失ハルニ及ンデ、何時シカ破却ノ悲運ヲソノ身ニ味ハウニ至レリ。當ニ運命ノ兒ノ免レ難キ悲哀ナルベシ。今ヤ全クソノ影ヲ沒シテレルモノアルノ事實ニ就イテハ前項ニ已ニ之ヲ述ベタリ。岩屋砲臺ノ本壘タル松帆臺場サヘモ、決シテ往時ノ儘ニテハアラザルナリ。今之ニ就イテ若干言ヲ費サムトス。

松帆臺場趾ハイマ全面ニ松樹生ヘ茂リテ鬱蒼タル美景ヲナセルモ、當時ハカク迄樹木アリシニハアラズ。土壘ノ如キモ、熊笹全面ヲ覆ヒテ反ツテ風情ヲ添ヘタルハ嬉シキモ、往年ノ建造物ハイマ全ク撤去セラレテ、カノ將卒ノ詰所ヲハジメ熔玉竈ノ如キモノノ跡ヲ止メズ、況ンヤ砲ノ影ダニ無ク、火藥庫彈藥庫ノ如キモタバ石壘ヲ遺存スルノミナリ。若人ノ雄々シク馳ケタルナル練兵場ハ、イマ枇杷畑トナリ居レルモ、コレ將ソノ一部ニ過ギズシテ、大半ハ菜圃ト化

シタリ。而シテ此ノ榮園トナレル地ガイマ一段ト地窪ニナリ居レルハ、後年カノ松帆堀湊ヲ埋立セル際ニ、土ヲ此ノ地ニ採取セルガタメナリトス。

拂川龍松ソノ他ノ臺場ニ就イテハ、前項ニ述べタルトコロナレバ、今ハ重ネテ言ハズ。

八、結語―岩屋砲臺ノ意義

ワガ國史中、時代トシテ最モ花々シキモノ之ヲ先ニシテハ源平時代南北朝時代等アリ、之ヲ後ニシテハ幕末時代明治時代等アリ。而シテ、前者ニ於ケル紛亂ハスベテ對内事情ニ起因セルニ、幕末史ノソレハ對外關係ニ原因スルトコロ頗ル多シ。

本史蹟ハ、コノ幕末史ノ中心トモ云フベキ對外事情ニ導カレテ作り成サレタルモノ、此ノ點ニ於イテマヅ注目スベキ史蹟ナリ。

幸カ不幸カ此ノ岩屋砲臺ニ於イテハ、華々シキ活躍ノ何等見ルベキモノ無クシテ已ミタリト雖モ、臺場ノ築造ソノモノガ已ニ述べタルガ如キ事情ノ下ニナサレタルモノナレバ、當シク國史ノ本流ノタマ中ニ立ツモノ、國史ノ全般ニ關與スルトコロ多キ遺蹟ニシテ、此ノ砲臺ノ有スル本質的意義ハ頗ル大ナルモノアリト云ハザルベカラズ。コノ意味ニ於イテ、最モ尊重スベキ史蹟ノ一タルヲ失ハズ。

當時同趣旨ノ下ニ築造セラレタル史蹟即チ砲臺ハ、必ズシモソノ數ニ乏シカラズ。就中、江戸灣内ノ品川臺場（嘉永六年創始）ヲハジメトシテ、攝海方面ニアリテハ、紀州加田浦ノ砲臺（安政元年）、廣路由良ノ砲臺（同年）、大阪灣内木津安治兩河口ノ砲臺（安政三年）、攝津西宮ノ

砲臺（文久二年）、同兵庫和田岬ノ砲臺（文久三年起工、元治元年竣成）、播州明石ノ砲臺（安政元年）等、更ニハ、長崎神之島伊王島ノ砲臺（安政元年）、箱館辨天崎ノ砲臺ノ如キ、ソノ主ナルモノトスベシ。コレ等ノ内、或ルモノハ今ヤ全ク破壊シ盡サレテソノ姿ヲ没シ去レルモアリ、或ルモノハ幸ヒニ能クソノ跡ヲ存シテ、國法ノ下ニ保護セラル、モノモアルナリ。

ワガ岩屋ノ砲臺ニ就イテハ、ソノ現況ハ已述ノ如ク、主臺場タル松帆ノソレハ能ク遺存シテ充分コレガ舊構ヲ窺ハシムルニ足ルモノアリ、シカモンノ規模ノ如キハ、同ジク攝海防備ヲ任トスルナル西宮砲臺ノソレ等ニ比較シテ異ル點モ尠ナカラズ。（註）彼此對照シテ以ツテ當時ニ於ケル築城術ノ技術ノ程ヲ窺フベク、延ヒテ又、泰西文化攝取ノ一端ヲモ知ルヲ得ルナリ。サレバ、彼此トモニ獨自ノ價值ヲ有スルモノニシテ、等シク愛重スベキ史蹟ナリトス。シカモンノ實況ニ就イテハ既述ノ如ク、臺場ノ或ルモノハ今ヤ全ク湮滅ニ歸シテ、僅カニソノ地點ヲ示スニ過ギザルモノアリ。サレバ、今ニ於イテ宜シク保存ノ方策ヲ立テ、之ガ保護ヲ永久ニセザルベカラズ。而シテ此ノコトハ、郷人ノ愛護心ニ俟ツテハジメテソノ美ヲ濟シ得ルモノタルコトヲ、茲ニ嚴肅ニ注意シ置カントス。（渡部委員）

註 岩屋ノ砲臺ト西宮ソノ他並ニ品川ノソレ等トノ比較ハ興味アル點ニシテ且ツ必要ナルモノナレドモ、今ハ姑ク措キ、追ツテ發表スルトコロアルベシ。

附記 本篇起草ニアタリテ參考セル料史ノ内、主ナル文献ヲ左ニ掲グ。本文ニソノ依據ヲ示

史

蹟

七四

セルモノハ此ノ限リニアラズ。

開國起原 陸軍歴史 海舟日記

岩倉公實記

續徳川實紀

大日本古文書（幕末外國關係

文書）攝津郷土史論

名

勝

調査委員 松本從之
同 山鳥吉五郎

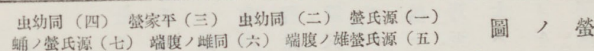
揖保郡

第五 龍野ノ螢

所在 揖保郡龍野町内龍野町

龍野町ノ東北ナル鷄龍山ノ東麓ニ祇園神社アリ、揖保川ノ清流滾々トシテ其東ヲ流レ小宅村ト堺ス、河ニ祇園橋ヲ架ス、河ノ中洲ニ數千坪ノ草原アリ内二千坪ヲ小學校運動場トシテ使用ス、橋ノ右岸ニハ女竹ノ叢林アリ洲ノ右側ニ猫柳繁茂シ河ノ左岸ニモ猫柳アリ其下方ニ樹木鬱蒼タル所アリ、近年急ニ螢ノ出現夥シク通常六月初旬ヨリ出デ初メ中旬頃其極ニ達ス、夕刻竹叢又ハ柳ノ間ヨリ飛ビ初メ次第ニ増加シテ發光スルノ景頗壯觀ヲ極ム、其期ニ至レバ祇園橋附近ニ見物人多數ニ出デ之ヲ賞觀ス、又捕虫網又ハ蠅不入ヲ携ヘテ濫獲スルモノアリ。

螢ハ昆虫類中鞘翅類ニ屬シ全ク熱ヲ伴ハザル奇異ノ發光ヲナスモノナリ、我國領土ニ産スル螢ハ二十數種アリ、此中最普通ナルハ源氏螢ト平家螢ニシテ前者ハ北海道樺太ヲ除キ後者ハ樺太ヲ除キテ沿ク産ス、源氏螢ハ雄ハ體長十乃至十五耗、雌ハ十二乃至十七耗ニ達ス、前胸背ハ紅色ニシテ中央ニ黑色縱條アリ。其中央膨大ス、清流ヲ好ンデ飛來ス、平家螢ハ體小ニシテ體長十耗内外、前胸背ハ紅色ヲ呈シ中央ノ凹メル黑色ノ一縱條アリ、此ヲ以テ源氏螢ト容易ニ區別シ得ベシ。泥水ノアル附近ヲ好ムヲ以テ河邊ヨリモ寧ロ田ノアル所ニ多シ、螢ノ雄ハ腹端ノ二節雌ハ腹端ニ近キ一節黃白色ヲ呈シ此部分ニ脂肪ノ變化セル微粒アリ氣管ヨリノ空氣ノ供給



汁液ヲ吸收スル害虫タリ。

(山鳥委員)

津 名 郡

第 六 五 色 濱

所在 津名郡鳥飼村

現・狀。五色濱ハ津名郡鳥飼村ノ海濱ノ總稱ニシテ、三原郡湊町ヨリ至ルモ又津名郡都志町ヨリスルモ約一軒ノ地點ニアリ。南部ハ筥飯ノ松原ノ北端、同村字奥ノ内ヨリ北部ハ佛崎ニ至ル間延長約三軒ニ及ビ幅最モ廣キ處二十二メートル、最モ狹キ處十三米ニ過ギズ。五色濱ノ名稱ハ嘗テ此海濱全部ニ赤白黒青黃等ノ色彩ヲ有スル小礫ガ一面ニ堆積セシヨ以テ此礫ヲ五色石ト稱シ、其海濱ヲ五色濱ト稱スルニ至リシナリ。

現今五色石ノ小礫ヲ存スルハ五色濱ノ南境ヨリ約一軒許ノ北方ヨリ北部ニシテ此石礫ハ漸次海濱ニ沿ヒテ北方ニ移動スルノ傾向ヲ有ス、コレ風位ト潮流トノ關係ニヨルモノノ如ク、村人ノ言ニヨレバ嘗テハ此海岸ニ西風多カリシモ近年ハ南風多クナレリトイフ。蓋シ五色石移動ノ證トナスコトヲ得ベキカ。

成・因。抑鳥飼村ノ南部字奥ノ内ヨリ同村中央部ノ字赤岸ニ至ル迄ニハ第三紀ノ丘陵海岸ニ追リ海濱ニテ斷崖ヲナス、其高サ平均十二米許、斷崖ト五色濱トノ境ニハ松帆村ヨリ都志ニ至ル縣道ヲ通ズ。此第三紀地層中ニハ石英ノ小圓礫ヲ多含セリ。蓋シ海蝕ノタメ此地層ノ末端海岸ニ崩レ此小礫ガ海濱ニ堆積セシモノナリ。

然ルニ五色石ハ南ヨリ北スルニ從ツテ次第ニ其數ヲ増加シ殊ニ赤石ヨリ北方ハ沖積地ニシテ此小礫ヲ包含セザルニ却ツテ其海濱ニ多ク堆積セルハ蓋シ潮流ノ作用ニヨリテ南部ヨリ北部ニ移動セシモノニシテ、其最モ多ク堆積セルハ同村北部ノ字二重ヨリ佛崎ニ至ル海濱ナリトス。地人ノ言ニヨレバ今ヨリ三十餘年前迄ハ佛崎ヨリ北部ニハ五色石ナカリシモ近年ニ至リテ少シク存在スルニ至リシトイフ。

二重海濱ニハ大正十五年二月ノ建立ニカ、ル「名勝五色濱」ノ碑ヲ存ス。

附 記

明治二十二年有栖川宮熾仁親王此濱ニ御來遊ノコトアリ。次デ明治二十九年ニハ英照皇太后ノ御思召ニヨリテ五色石六箱ヲ獻納セリ。更ニ明治三十三年大正天皇（當時皇太子）御婚儀ニ際シテハ奉祝ノタメ當村小學校生徒ヨリ三箱ヲ奉獻シ、大正四年大正天皇御即位式ノ砌ニモ當村小學校生徒ヨリ再度獻納セリ。尙桃山御陵ノ陵庭竝ニ武庫離宮ノ宮庭ノ敷石モ此五色石ヲ以テセラレタリトイフ。（山鳥松本委員）